

鹿沼に生きた人 生きている本

第5号

～千葉県三の記録した鹿沼ことば～



私が尋常3年の時、父は、こんどは、ずっと南の榆木という村に、赴任しました。そこは、ちょうど山が野に開けるところで、かなりな河もあり、広い田圃もあり、そして、村も家並がつづいて、賑やかな宿場になっていました。もとの例幣使街道で、江戸から日光へ参拝の行列が通った道筋に当ります。で、宿のうちには、上の間屋、下の間屋などと云う家号がのこっており、村端れには、右 江戸へ何里、などと刻んだ古い石標が立っていたりしました。

私達の一家は、榆木に20年もおりました。その間に、私は小学校を出て、3里離れた宇都宮の中学に入り、そこを卒業してから、東京へ出て、大人となりました。

従って、私の幼年少年時代の大部分は、この榆木で送られたわけで、この集に集めた創作の、大方の材料も、またその榆木村の生活から獲っていると云ってよいのであります。（千葉県三『童話集 トテ馬車』より「私の生い立ち」から、本誌2頁～）

2021年9月

小さな旅クラブ 鹿沼

- ① 鹿沼ゆかりの児童文学者、千葉県三つてどんな人？ 生まれ育った鹿沼の回想と、地元ことば豊かな作品の中から幾つか。

『童話集 トテ馬車』より

(昭和4年6月5日・古今書院発行)

私の生い立ち

千葉県三



東北線の宇都宮の真北に当って、低いけれど、三角帽のように恐ろしくとがった一群の山々が見えます。昔から、黄金が出るというので、篠井の金山と呼ばれています。私の母の故郷の篠井村は、その山の麓にあって、私はそこで生れたと云います。母の家は、村でも大きな古い農家でした。父は、その村の小学校に奉職していました。

私がまだ2つの時、父は今市の在の吉澤という所に、校長になって赴任しました。私達はそこに7年住んで居りましたから、私の幼い時の記憶は、その吉澤村に初まっております。日光山の山裾で、名高い杉並木が、昼も暗く繁って村の真中を貫いております。せまい山間をきり開いて、冷い山水を集めて、痩せた田がつくられていました。1町行って1軒、3町行って2軒というように、杉並木に沿って家がちらばっていました。そんな寒村でしたから、友達もなく、私は毎日、大抵弟と2人で遊んでいました。山おろしに吹き落される杉の小枝を拾って、炭焼ごっこをした事などを覚えています。並木を太鼓を叩きながら上ってくる、飴屋さんの頭にかざした小旗が、美しく見えた事なども覚えています。山に近いので、雪が早く来ます。お母さんは、いろんな昔から云い伝えたお話を知っていて、長い冬の間、爐傍で私達に話して聞かせました。今は、母も亡く、その話も大方は忘れ去っています。惜しいことです。

私が尋常3年の時、父は、こんどは、ずっと南の楡木という村に、赴任しました。そこは、ちょうど山が野に開けるところで、かなりな河もあり、広い田圃もあり、そして、村も家並がつづいて、賑やかな宿場になっていました。もとの例幣使街道で、江戸から日光へ参拝の行列が通った道筋に当ります。で、宿のうちには、上の問屋、下の問屋などと云う家号がのこっており、村端れには、右 江戸へ何里、などと刻んだ古い石標が立っていたりしました。

私達の一家は、榆木に20年もおりました。その間に、私は小学校を出て、3里離れた宇都宮の中学に入り、そこを卒業してから、東京へ出て、大人となりました。

従って、私の幼年少年時代の大部分は、この榆木で送られたわけで、この集に集めた創作の、大方の材料も、またその榆木村の生活から獲^えていると云ってよいのであります。

私の幼少年時代は、決して豊かなものではなかったが、しかし明るい、自由な、^{あたたか}温いものでありました。父は、厳格のうちにも終始私を誇りとして、伸び行くものを伸びゆくままに育ててくれました。母は、稀なる卒直さと単純^{いつ}さで、私を愛くしんでくれました。私は、それを父と母とに感謝^あたく思います。

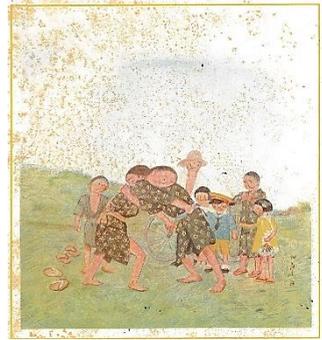
おかしいことに、私が中学を出た時の希望^{のぞみ}は、すばらしい大政治家になる事でありました。それが、今のように童話を書いて行こうと思ひ定めるに至ったのは、東京へ出て、コドモ社の御厄介になり、そこで雑誌「童話」の編輯に携った事が機縁となったのであります。私の行くべき道をハッキリと知らせて戴いた点で、コドモ社の社主木元平太郎先生、それから童話編輯上、常に歩みを揃えてくれた川上四郎画伯、寄稿して下さった諸先輩、童話愛読者の方々に心からお礼を申し上げねばなりません。殊に、私の童話表現上、目を覚まさせてくれたのは、地方の幼い読者の、方言で書かれた投書でありました。

現在、私は、水谷まさる、酒井朝彦、伊藤貴麿、澁澤青花、松原至大の諸氏と^{いっしょ}に、同人雑誌「童話文学」を出して、その誌上で毎月創作童話を発表しております。これらの真面目な同志を得た事は非常な喜びで、いよいよこの道に励んで行こうと思っています。

本集には、特に、郷土的な童話を集めました。

本集の刊行を、御快諾下さった、古今書院主橋本福松氏、装幀や口絵を一手でひきうけて下さった川上四郎画伯、本集刊行について特に御尽力下さった、土田耕平氏、島田忠夫氏、お忙しい所を眼を通して下さった竹内敏雄氏に厚く御礼申し上げます。

(本文は『童話集 トテ馬車』巻末に掲載されたものです。)



本書口絵

鷹の巣取り

ダイシャクボウのぼたん杉に、鷹が巣をかけたそうさ。

「おめえ見たけ」と仙ちゃんに聞くと、

「見たとも、おら、草刈のけえりに見た」と云う。

そばにいる小さい助治まで、

「おらも見た、でっかい鳥だぞ。こう、はねえひろげて、西山から、ダイシャクボウの
さき、グリーンとのしてっつけ」なんて云う。

「助治が見たな、烏だんべ」とひやかすと、おきになって、

「烏だもんか。おめえ見ねえから知んねんだ。烏と鷹あ、とび方がちがわい。なあ、
仙ちゃん」と云う。

あんまり、みんなが見た見たと云うから、おれも、ほんとは見ないんだけど、見た
ことにした。

「ひよっこがあんべっち話だな」

「うん、若え衆が、とりにいくっちぞ」

「とりてえなあ。おららでも、とれべか」

「取れねことも、あんめと思うな」

こんなわけで、おれら5人の子供仲間が、若い衆に知られないように、鷹の巣を
取りに行くことになった。

仙ちゃんに、三ちゃんに、喜作ちゃんに、助治に、おれと。

細引だの、ナイフだの、なただの、鉄の棒だの、いろんなものを用意した、助治は
ひよっこを入れる竹の籠を持って来た。喜作ちゃんは、ひよっこ面を持って来た。

「なんにすんだ」ときくと、

「これかぶったら、つつかれても痛かあんめ」と云った。親鳥にかかられた時の用心
なんだ。

「うめえことかんげえるなあ」と、みんな感心してしまった。

ならんで軍歌を歌いながら、田圃をぬけて山の下に行った。

ぼたん杉のところまで行くには、一度峰へ上って、それからまた谷の方へおりなく
ちゃならない。峰までは道があるが、それから先はひどい藪だ。それでも、みんな、
口笛をふいたり大声でどなったりしながら、元気よくおりていった。

遠くからは、いつも見ていたけれど、こんな近くで、ぼたん杉を見るのは、誰もはじ
めてだ。

「でっけえなあ！」と、おれらは、しんから驚いて、上を見上げた。

おれらは、相談して、傍にはえている小さい杉の木をのぼって行って、それから、

ぼたん杉の下枝に乗り移ることにした。木のぼりのうまい喜作ちゃんが、まっさきのぼりはじめた。おれらも、みんなその後につづいた。

ぼたん杉にうつると、あとは楽だった。横枝が、太いや細いや、はしごを組んだように出ている、それを、鉄棒のように、のぼって行けばよかった。だけど、そのうちに、みんなくたびれてしまって、のぼるのがいやになって来た。だれも、てんでに枝にまたがって、一休みした。

「まるで、お寺んなかみてえだなあ」と、誰かが上を見上げて云った。どの枝もその先にだけ葉が茂って、まるで筒のようにまわりをかこんでいる。中はガランドウで、はだかの枝が、傘の骨のように四方へつきだしているだけだ。

ふいと、三ちゃんがどなった。

「見な！ ありゃあ、鷹の巣じゃねえか」

三ちゃんのかけている、太い枝の先に、もじゃもじゃしたかたまりが見えたのだ。今思うと、それはやどり木だったかも知れない。その時は、みんな鷹の巣だ、鷹の巣だと云った。

三ちゃんは、自分が見つけたと思って、大喜びで、そっちへ枝をつたわって行った。ずいぶん危いところだったけれど、上手に調子をとって渡っていった。と、もう少しで手が届こうと思うころ、三ちゃんのからだ身体が、クルリとねじれて、中心を失ったかと思うと、そのまま、まるで鳥の羽みたいに、着物をひろげて、すーっと下へ落ちて行った。

だれも、声ひとつ立てないで、ぼんやりそれを見ていた。そのうちに、気がつくと、みんな真青になってしまった。どう思ったって、三ちゃんが無事でいようななどは思われない。大怪我をして、うなっているか、それでなけりゃ……。

大へんなことになってしまった。

おれたちは、とにかく、下へすべりおりた。そして、そろそろと、三ちゃんが落ちたと思うあたりへ、胸をドキドキさせながら、行って見た。……いない。

「三ちゃあん……三ちゃあん……」

みんな、かわるがわる呼んで見た。何の返事もない。

おれらは、薄暗い森の中の傾斜を、三ちゃんがおろん死んでいる事と想像しながら、だんだん谷の方へおりて行った。

すると、思ったより離れた、もう谷底に近い、腐った木の葉の中に、半分うまって、三ちゃんが、ぼんやり坐っていた。みんな、ワッと云ってそこへかけおりた。

「どうした、三ちゃん」

「なんともねえけ」

「手えだして見な。有ら、有ら」

「足があっけ。有ら、足も有ら」

「立てっけ、立って見な。立てなかんべ、な」

「おら、死んでるにちげえねと思ってた。よかったなあ、三ちゃん」

おれらは、せいーぱいの慰めの言葉をあびせて、三ちゃんを、総がかりで抱きおこして、そろそろと森から連れだした。おれと仙ちゃんが両方から手を肩にかついだ。喜作ちゃんが後から腰を抱いた。助治は先に立って、道の邪魔になる木の枝や蜘蛛の巣をのけた。道まで出るのにずいぶん骨が折れた。でも、どうかこうか、三ちゃんを山の下まで連れおろした。

三ちゃんは、どこも怪我もなかったし、ただ、びっくりしただけなんだから、とうに元気になっていた。歩けば歩かれるし、笑えば笑えたんだ。けれど、おれらがあんまり大事にするものだから、すっかり甘えてしまって、
「苦しゅけ三ちゃん。はあ、すぐだかんね」なんて云うと、わざと、
「うん、くるしゅ」なんて云うんだ。

それが、だんだんおれらにも解ってきた。

山をおりたとき、喜作ちゃんが、
「三ちゃん、おめえ、家^{うち}がどっちにあるか、わかるけ。云ってみな」と聞いた。
すると、三ちゃんは、ちゃんと家の方をむいていたのに、クルリと、うしろをむいて、とても甘ったれた声で、
「アッチー」と云った。

それを聞くと、おれらは、こらえきれなくなって、とうとう一度に、わーっと、笑いだしてしまった。

そして、三ちゃんを真中に、アッチー、アッチーと云っては、アハアハ笑いながら、村へ帰って来た。

それから、おれらの仲間には、この、アッチーがはやり言葉になった。

「仙ちゃん、おれの帽子、しんねか」

こんなことを聞くと、仙ちゃんはクルリと向うをむいて、
「アッチー」と云うのだ。

その度に、おれらはお腹^{なか}をかかえて笑いこけた。

——昭和3年6月作——

乗合馬車

馬車がひどくゆれだした。

私は、後頭^{うしろあたま}をゴツリと窓がまちに打ちつけて、ハッとして眼をさました。

いつの間にか、向い側には、前から乗っていたハゲ頭のおじいさんのほかに、顔

の青いやせた小母さんが、大きな風呂敷包をかかえて乗りこんでいる。

どこで寝てしまったのかわからない。

停車場でおすしをたべた。それから、ガタ馬車に乗りこんだ。^{あしはらむら}蘆原村まで、3里だと聞いた。途中の道が霜どけでだいぶいたんていとう云うので、はねだされないうように、お父さんとお母さんの間へ、スッポリくさびのようにはめこませられた。もう、間もなく蘆原へつくのだと思うと、胸がドキドキして、嬉しいような、こわいような思いで、いっばいだった。

「こんど行く村は、宿場だっちから、おまんじゅうやだの、おせんべいやだの、物売店ものうりみせがいっばいあるんだよ」と、お母さんに聞かせられていた。

「宿場の子供は、いじが悪い。いじめられないように、行ってもおとなしくしてんだよ」とも聞かせられていた。

そんなことを思いたしながら、後から後から馬車の前に現われてくる、知らない村の景色をいっしんにながめていた。

よく晴れた日で、馬の蹄も、パカパカ乾いた気持のよい音を立てていた。

馬車屋は、ひっきりなしに、

トー……テー……トテトトー……

と、高々とラッパを吹いていた。

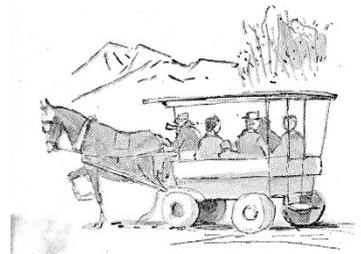
縁側へかけだして来て、両手をあげて、何か叫んでいる子供もあった。畑の中の小径こみちで、馬車が通りすぎるのを待っている娘さんもあった。

馬車は、ガラガラと車を鳴らして、小刻みにゆれながら、藪の影を通ったり、柿の木の下をぐったりして、進んで行くのだった。

おじいさんは、おしゃべり好きで、ひとりで面白そうに、何かしゃべりつづけていた。「あんたがた、どこへ行きなさりやんす……ハハア、勝木まで、それはちょうどいい、私わたくしおその先の布山ぬのやままで行くんでさ……勝木はどちらで……え？ 学校で……そんなじゃ、先生でござんすね……そりゃまあ……なんしろ道が悪いんで困りやんす……ええ、ここらまではまだいいがね、ひでえなあ、蘆原の村境でござんさあ……まあ、宮街道の、箱根山うちとこかね……そこせえ越しゃあ、楽なもんでさ……どっからおいでんだったんで……土澤つちさわってと、今市在いまいちで……成なある……いいとこでやんさ……蘆原なんざ、からきしだめで……そりゃあま、開けてるってええ、そんなもんだが、人氣が悪いとこでね……骨が折れやんすよ……いってえ云うと、やくざ人間が多すぎんでさ……つまりその……」

こんな風に、きりもなくしゃべっていた。私は、

岩波少年文庫
「とらちゃんの日記」より



そのころから寝てしまったものらしい。

眼がさめた時は、いつの間にか村を通りこして、馬車は林の中を、よっぱらいみたいにぐらぐらゆれにゆれながら通っていた。

「かわいそうに、こんじゃ、寝てもいらんね、ね」

小母さんが、そう云って、笑いながら、紙袋の中から、真黒な鉄砲玉を3つ取りだして、私の手に握らせてくれた。

道の両側には、ヒョロヒョロした、骨のような雑木が一面に生えていた。林は、奥深く透けて見えたが、もう木の芽がふいているので、遠くの方は、銀色にかすんでいた。

道はひどい霜ぬかりで、車の輪が、えぐるように泥にくいこんで行く。

「こころが一番の難所だ。あと一丁場ひとちょうばのしんぼうだよ」と、馬車屋がふりむきもせず云った。

「それにしても、ちっとひでえようだな。車でもいたんでんじゃねえか」

おじいさんは、両手で腰かけにしがみついて、大きな声で云った。

「お客様もひどかんべが、こっちもつれえ。この道じゃ、馬もへたばるべし、車もいたむべよ」

馬車屋は、手綱をあやつりながら、ブリブリしてやりかえた。

ようやく、林が薄くなって、その向うに、ひろびろとした野原が見えて来た。乾いた白い道が、まっすぐにその野原を横切っていた。

馬車屋は鞭をならした。馬は勢よく、土煙を立ててかけた。

荒れた野原だった。眼のとどくまで、赤くはげた土肌と、灰色の芝原がつづいていて、こんもりした木立もないし、家らしいものも一つも見えなかった。そして、その果てには、紫色の高い山々が、寒そうに裸で聳えていた。

山の形で、それが毎日見馴れていた、日光の連山だということがすぐにわかった。

野原は、平らのように見えても、大きくうねうねと波打っていた。馬車は、ある時は盛り上った、丘の背のようなところを通ったり、ある時は、低く凹地へおりたりして、きしみながら進んで行った。その度に、日光山は見えたりかくれたりした。ところどころに、手の平ほどの畑があって、痩せた麦や豆が、半分は埃に埋れてつくられていた。日蔭の崖からは、霜柱が、赤土といっしょにホロホロこぼれていた。

間もなく、馬車は1軒の小屋の前にとまった。

「車の工合が悪くなったから、すまねえが、ちょっくらおりてもらうべ」

馬車屋が入口へ顔を出して云った。おじいさんは、ブツブツ云いながら立上った。青い顔の小母さんも、包みをかかえておりた。私たちも、ぞろぞろそのあとにつづいた。

そこは、大きな凹地の底になっていて、入日が、片側の傾斜だけを明々あかあかとてらしていた。

屋根も柱もひどくゆがんで、まわりを^{むしろ}蓆でかこんでやっと雨や風をふせている、みすばらしい小屋だった。蓆の蔭には、ひからびた小さい蜜柑や、ほこりだらけの菓子箱が、少しばかりならべてあった。

腰のまがったおばあさんが、お茶盆を持って出て来た。

「おつかれでやんしょ。お茶ひとつ、おあがんなんしょ」

おばあさんは、私たちが腰かけて休んでいる道ばたの芝の上へ、お茶盆を置くと、又小屋の中へひっかえして行った。

私は、そのあとについて行って、小屋の中をのぞいて見た。

薄暗い土間に、爐がきってあって、トトロと火が燃えていた。

「坊ちゃん、どこへ行きやんす」と、おばあさんが、爐の火を直しながらきいた。

「勝木……」

私は、小さい声で答えた。

「勝木は、学校さいぐんじゃねえけ。なんでも、新しい校長先生がくるっち話だっけが」

私は、そと、お父さんの方をふりかえって見た。

「やっぱり、そうだんべ。どうもおら、見たとこから、そうしゅと思ったんだ……そんじゃ、あすこにいんのが校長先生なんだね」

私は、コックリうなずいて見せた。

おばあさんは、急に大きな声で、裏口の方をむいて、

「善、善はいねえか」とどなった。

裏の戸がガラリとあいて、ちょうど私ぐらいの男の子がとびこんで来た。

「なんだ、おばあちゃん！」

男の子は、膝から下むきだしにして藁草履をはいていた。眼のまんまるい賢こそうな子供だった。

「あすこにいんのが、こんど来た校長先生だぞ。おめえ、鼻汁^{はな}かんで、行っておじぎして来な」

おばあさんは、ボロ切れで子供の鼻の下をふいてやった。子供は、赤い顔をして、もじもじしていたが、とうとう思い切ったように外へ出て行って、お父さんの前に、ピョコリと頭をさげると、大急ぎで又こちらへとんで帰った。

「なんち、そそっかしゅおじぎの仕様だ」

おばあさんは、菓子箱からお菓子をつかみ出して、別のお盆にのせて、お父さんのところへ持って行った。

「尋常3年になんでございます。しょうのねえきかんぼでございます。又先生の御厄介様になるんでございます」

お父さんは、ニコニコしてうなずいていた。

ふりかえって見ると、男の子はもう家の中にはいなかった。そして、裏の方で、唱

歌を歌うはればれとした声が聞えた。

私も、裏口へまわって見た。すると、男の子は、大きな木の箱の上に腰をかけて、両脚をバタバタ動かしながら、愉快そうに歌っていた。

「おめえ、校長先生の子供なんか」

男の子は、私を見ると、はにかみもせずにごう話しかけた。

「うん」

私はうなずいて見せた。

「おめえ、何年生なんの」

「3年生……」

「んじゃ、おれと同じだ。……おめえ、校長先生の子供だから、学問できんべ、ね。おら、清ちゃんと、謹ちゃんにゃ負けたことねんだ。おめえにゃ、負けっかもしんね。負けたってしかたがねえ。校長先生の子供だもん」

「清ちゃんて、どこの子供？」

「清ちゃんは、村長さんの子供で、謹ちゃんは、駐在所の子供なんだ。おら、この2人にゃ、どうしたって負けたかねえんだ。おれのこと、原んぼ、原んぼって、いつも悪くいうんだ。原んぼだって、学問せえ出来りゃ、えらくなれら。おら、そう思うんだ」

「原んぼって、なに」

「おれにも、わかんね」

男の子は、急に黙りこんで考えていたが、

「きっと原んなかにいて、貧乏だもんでそんな事云うんだんべ」と、しよげた声で答えた。

けれど、少したつと、又元気を取りもとして、

「おめえ、いいもの見せてやんべ。この下のぞいて見な」と腰かけている箱を指さして、大きな声で云った。

箱の横が格子になっていた。そこからのぞいて見ると、藁の中に、可愛^かい野兎^あの子が2匹はいていた。

「おれがつかめえたんだ。可愛かんべ」

男の子は、箱からおりと、自分も、眼を細くして中をのぞきこんだ。

おら、学校から帰ると、友達がねえから、原んなか、ひとりでかけて歩いて遊ぶんだ。面白えぜ。いろんなもの、めっかるんだ。去年、おら、いい出水^{てみず}めった。むこうの沢のくぼっ地なんだよ。とてもきれいな水が、モッコンモッコン、いくらでも湧きたしてるんだ。おらそれに、チョロチョロ金水^{きんみず}って名をつけたんだ。誰もしんねんだよ。お父ちゃんもしんなかったんだ。そしたら、去年の夏、ひでりで家のこの出水がかれちゃったんだ」

男の子は、そばの細い竹筒の先から、音を立てて流れ出している、小さな泉を指さして云った。

「そんなとき、おとっちゃんを、そのチョロチョロ金水んとこ連れてってやったんだよ。お父ちゃん、喜んだぜ、ずいぶん。こんだ、おめえ遊びに来たら、そこへ連れてってやら」
男の子は、

「きっと来べ、な、な」と幾度も念を押して、とうとう私に指切りをさせた。

それから、2人はならんで、兎の箱に腰かけて、いろんな話をした。野原に咲く花のことだの、茸のことだの、鳥の巣のことだの、私の住んでいた村のことだの、山登りのことだの。

そのうちに、凹地はだんだん陰が多くなって、頭の上の青空は、冬の夕方の静かな冷い光に満ちて来た。

馬車屋が、ラッパを吹き鳴らした。車の修繕がすんだしらせだった。

私は、さよならをして、家の前へ廻った。

お父さんも、お母さんも、馬車の入口で、私のくるのを待っていた。

お父さんは、お盆の上に、10銭銀貨を1枚置いて、馬車にのりこんだ。

鞭が鳴って、馬車は静かに、きしりながら凹地をあがり初めた。

おばあさんが、あとを追いかけて来て、銀貨をお父さんに返そうとした。けれど、お父さんが受取らないものだから、又あともどりして、今度は新聞紙に菓子を一包み入れて持って来た。そして、むりやり私の膝に押しつけて置いて、ていねいにおじぎをして帰って行った。

凹地を出ると、まだ夕日が残っていた。

ふりかえると、凹地の底は、もうすっかり夕方らしい薄闇がこめていた。小屋の門口に、おばあさんといっしょに、立ってこちらを見送っている子供の姿が、ぼんやりと影のように見えていた。

馬車屋が、馬を急がせながら話した。

この高原は、水もなく、地味もやせて、蘆原のうちでの、しょうのないもてあましの土地だそう。広い野原の中に、たった10軒ばかりの家があるが、みんな貧しくて、村の人からは、原んぼ、原んぼと呼ばれて、特別の扱いを受けていると云うことだった。

うすら寒い、淋しい原の道がしばらくつづいて、やがて、眼の下に、銀色の河が帯のようにうねっている、肥えた平野があらわれて来た。河の上には、長い長い橋が、眉毛のように丸くなってかかっていた。その向うには、白壁や、学校の屋根や、お寺や、火の見やぐらが、幾重にも重り合った、にぎやかな村が、夕霧の中に、もう灯がポチポチまたたいていた。

馬車は、高々とラッパを鳴らして、長い坂道を、勢よく、その村をさしてかけおりて行った。

——昭和4年1月作——

『地蔵さま』より
(昭和7年4月10日・古今書院発行)

宿の子供

一
馬車がつくと、私は真先にとびおりた。
子供等が、ずらりと並んで、じろじろ、私たちをながめ
ている。

「おっかなげな、先生だな」

「長えひげ、はやしてんだな」

お父さんを見て、こそこそ、そんなことを云っている。

「あれが、校長先生の子供だな」

「何年生だんべ。ちっちゃから、1年生かもしんねな」

私のことを云っているんだ。

「新しゅ袴はいてんだな」

1人がそいって、平気な顔で、私の袴にさわって見る。

こんにやく屋と、まんじゅう屋の間をはいって、桑畑の中をぬけると、そこに、まっくろく塗った、つかえ棒をした、大きな長屋みたいな家が、横っちょを向いて立っていた。それが、学校だった。なんだか、お歯黒をつけたおばあさんの口を、見るような気がした。「こらあ、まあ、先生さんでござりゃんすか。おつかれでござりゃんしょ。へえ、奥さん。へえへえ、坊ちゃん。おりこうでやんすなあ」

頭のはげた、背の低いおじいさんが出て来て、やたらにおじぎをする。小使の六爺じいだった。

入口の土間に、むしろをいいて、泥芋が積んであった。私は、それをひとつ踏みつけて、あぶなく尻餅をつきそうになった。

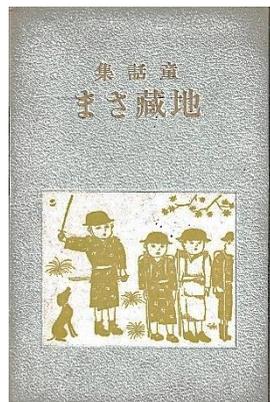
座敷へ上って、ふりかえると、さっきの子供たちが、みんな来て、入口からのぞきこんでいる。

「こら！ そうたときさ、立ってんじゃねえ。見ろ！ こんだの先生に、宿の子供等あ、行儀わりの悪い子供等だと思われっから……」

六爺が、しかりつけると、ズルンと鼻汁をすすって、あとへさがるが、それっきり動かない。

二

朝起きて見ると、深い霧だ。





本書口絵

まだ荷物をといてないから、おもちゃも、絵本もない。ひとりで、庭へおりて見た。

いろんな木がある。松の木だの、檜の木だの、桜の木だの、梅の木だの、なんだかわからない木だの。どの木も、露にぬれて、ひいやりとならんでいる。「坊ちゃん、早ええね！」

ふりかえると、六爺が、竹箒をもって立っている。「これ、なんの木？」

すぐ前にある、線香花火みたいに、四方へ枝をつきだした木をゆびさして、聞いて見た。

「李^{すもも}でやんさ！」

六爺は、そう云って、チンと手ばなをかんだ。

「なる？」

「なるにもなんにも、小粒だけど、砂糖づけみてえに、あめえ李でね。枝が折れるほどなりやんさ！」

私は、すっかり嬉しくなった。そして、この木を、一番大切^{だいじ}にしてやろうと思った。

生徒が、だんだん集って来た。

朝ご飯をたべて、また庭へ出て見ると、二三人の、大きい生徒が、李の木の下で、首をあつめて何かしている。とりもちをねって、李の枝にからみつけているのだ。

「何すんだ、おめえら！」

みんな、だまって、私の顔を見ている。

「この木いじめると、お父さんに、いいつけてやんぞ！」

すると、一番大きい子が、いきなり、口をゆがめて云った。

「いばんない！」

ほかの子も云った。

「いばんない！」

「この木は、みんな、おらが木だぞ」

「ちがわい。おら家^もでこして来たら、おら家の木じゃねえか！」

「いばんない！」

またひとりが云った。

「学校だって、家だって、木だって、みんな村のもんじゃねえか！」

私は、胸がドキドキして、口がきけなかった。こんなことを云われたのは、はじめてだった。

三

格子窓に、障子をはめてあって、へんな、うすぐらい教室だった。

私は、小さいので、一番前の席へつかせられた。

お習字の時間。

私が書きはじめると、横からも、後からも、みんな首をのばしてのぞきこむ。

「うめえか？」

「うめえ、助^{すけ}やんよりうめえな！」

いつの間にか、大ぜいあつまって来て、私のまわりは、いき苦しいほどかこまれてしまう。

私は、赤くなりながら、それでもいづらか得意になって、うすぐらい手もとを、いっしんに見つめて筆を運んで行く。

「先生！ しょんべん！」と、だれかが云う。すると、それにつづいて、幾人も、しょんべん！ しょんべん！ といって立って行く。

私も便所へ行く。

帰ってくると、さっきのお習字が、つばで、壁にはりつけてある。だれがつけたか、赤い白墨で、めちゃめちゃに丸がかいてある。

「うめえなあ！ うめえなあ！」といって、はやしたてる。

先生がいないのだ。

四

お草紙をかいに、紙屋へいく。

「坊ちゃん、よく来やんしたね。おとみもいっから、あがって遊んでいきなんしょ」

おばさんが、こういって、抱きあげるようにして、奥の間へつれて行く。

「ほんとに、おとなしゅ、坊ちゃんだね」

おばさんは、長いきせるで、たばこをのみのみ、私たちをながめている。

おとみちゃんは、だまって、紙鶴を折っている。私は、ポツリ、ポツリ、砂糖豆をたべながら、その白い指の先を見つめている。一つ折れると、膝の上に置いてくれる。また一つ折れると、置いてくれる。あったかい日ざしが、お縁側から、その指のところまでとどいている。

「やあい！」

「女と遊んでら、やあい！」

ふいに、垣根の向うで声がする。だれか、四五人してのぞいているのだ。

おとみちゃんと、私は、ハッとして顔を見合わせる。

「いじわる！」

おとみちゃんは云って、ピシャリと障子をしめた。

草紙をかかえて、かえってくると、どこからか出て来て、あとから、ぞろぞろついてくる。

「やあい、女と遊んで、やあい」という。

安治^{やすじ}が大将で、小さい子供をけしかけているのだ。

「女と遊んじゃ、わりいのか」

「わりい！」

「なぜわりい！」

安治はだまっている。

私は、かまわずに歩きだした。こんどはついてこない。離れたところで歌うように節をつけてはやし立てているのだ。

「女とあすんで、やあい、やあい」

(昭和5年8月作)

峠みち

青馬あおの背の両わきに、炬燵やぐらをひとつずつ、綱ゆわで結いつけて、右の方へ私、左の方へ妹のおやすがのっていました。お母ちゃんは真中の鞍にまたがって、日除けに、大きな麦わら帽をかぶっていました。

けわしい峠道でした。きたない手拭ほおかむで頬冠ろくじいりした六爺が、手綱をひいて先に立って、そのあとから、もっり、もっり青馬が上っていくのでした。青馬の首の鈴が、チャランコ、チャランコ、いい音を立てて鳴りました。

「おやす、足が痛えけ。てっぺんさついたら、休ませてやっかんね。」

お母ちゃんは、気づかわしそうに、何度も身をこごめて、左の方のおやすに声をかけました。

「もう一息の辛抱でやんすよ。」

六爺も、ときどき元気のいい声ではげました。

おやすが五ツで、私が七ツでした。

おやすが足が悪いので、毎年夏になると、この峠を越えて、瀧の温泉まで湯治にいくのです。

「去年から見ツと、道が悪いよだね。」

「年々わり悪くなりやんさ。なんしろ、山水やまみずで荒されっかんね」

「それでも、1時までには着かれやんすけ。」

「着かれんにも何にも。温泉さつかって、一杯いっぺいやって、日のあるうちけえ帰れやんさ——」

お母ちゃんと、六爺は、そんな話をしていました。私は、やぐらの縁へりにつかまって、いつかうとうとゆられていくのでした。

青馬は、真蒼まっさおな葉っぱの下をぐったり、日の当る草場を横切ったりして進んでいきました。山じゅう、ジャンジャン蝉が鳴いていました。驚いて飛び立ちながら、おしっこをひっかけて行くやつなどもありました。

間もなく、ひんやりした杉の木立をぬけると、頂きに出ました。頂きといっても、見晴しひとつない、さびれた峠でした。一面の熊笹の上に、ひっそりと日が当たっていました。

私たちは、もと茶店があったという、熊笹の中の空地へおりて休みました。そこで、用意して来た瓶の水をのんで、海苔巻をたべました。六爺も、頭のように大きな握飯を出してたべはじめました。

ふいに、後の道もない熊笹の中を、ガサガサ押しわけて、一人の男が出て来ました。汚ない着物を着て、草鞋をはいた、眼のギョロンとした男でした。片手に、何かはいった、大きな袋をさげていました。

男は、ジロジロ私達をながめていましたが、「飯があまったら、食わせてくんねかね。」と、ニヤニヤ笑って云いました。

「さあ、おあがんなんしょ。」

お母ちゃんは、食べるこった竹の皮の包みを、男の方へ押しやりました。六爺は、知らん顔をして握飯をたべていました。

男は、太いよくれた指で、海苔巻をつまんで、グングン丸ごと喉へ送りこみました。私とおやすは、お母ちゃんの手にすがって、それを眺めていました。見ているうちに、竹の皮包はからっぽになりました。

「ご馳走さまでやんした。今朝っから、なんにもたべねえもんだからね。」

男は、きまりわるそうに口のはたをふいて云いました。

「おかみさん、どこさいぐんだね。」

「瀧さいぐんでござんす。」

お母ちゃんは、小ちゃい声で答えました。

「湯治かね。」

「ええ」

「こっちの子供あ、青い面してんね。どっか悪いんかね。」

「ええ、足が悪いもんだかね。」

「いくつなんね。」

「五ツでござんす。」

お母ちゃんは、そっと、おやすの頭をなでながら云いました。

「かわいそに。どら、いいもんくれてやんべ。」

男は、ふとところを探して、何か紙に包んだものを出して、おやすの手に渡しました。「逃げらんねよに、よく、つかんでな。そして早くたっしやんなって帰んなよ。かわいそにな。……それじゃ、おかみさん、おご馳走さんでござんした。」

男は、ていねいにもう一度礼をいって、また熊笹の中へごそごそ、入って行ってしまいました。

おやすの貰った、紙の中には、足の折れた頬白が1羽はいていました。

間もなく、私たちも、青馬にのって峠を下っていきました。

「ああ、どういふ人だんべね。」

お母ちゃんが、六爺にききました。

「まむし取りでやんさ。」

六爺が、ぶっきら棒にこたえました。

「そんじゃ、あの袋ンなかに、まむしがはいてたんけ。」

私はびっくりしていいました。

「うん、二三十匹は、へえってたんべな。あのおもさじゃあ。」

「おお、やだ！」

おやすは、おびえたように叫びました。

「おら、こうたもんいらね。兄あにさんにやんべよ。」

そして、さっき貰った頬白を、馬の背ごしに、紙ごと私の方へさしのべました。私は、手をのばして受取ろうとしました。そのはずみに、紙がはぐれて、頬白は下へころげ落ちました。傷ついた小鳥は、悲しそうに啼いて、バタバタ羽ばたきながら、草むらの中へ逃げこんで行ったのでした。

(昭和5年6月作)

『とらちゃんの日記』より

(昭和35年6月20日・岩波書店発行)

けんか

雨のふる日に、おれら高等⁽¹⁾3年の教室へ、4年の録るくちゃんが、ひょっこりはいてきた。

「丑うし！ 丑はいねえか！」

録ちゃんは、教室をキョロ、キョロ、見まわした。そして、すみっこに立っている丑を見つけると、

「いいものやっから、4年の教室さこう。」といった。

おれらは、

「また、4年のやつら、なにかわるいたずらかんげえて、丑のこと、いじめる気なんだな。」と思った。それで、おもしろ半分に、ふたりのあとをついていった。

4年の教室の前までくると、ろうかの両がわに、4年生が、びっしりならんで、こっち



を見て、ニヤニヤわらっていた。丑は、きみわるげにそこへ立ちどまった。「なにしてんだ。こっちさこうちのに。」

録ちゃんは、丑の手をつかまえて、グイと4年生の中へつきだした。

丑は、2足3足前へでたとすると、ツルリとすべって、大きな音をたてて、あおむけにひっくりかえった。ろうかの板に、ろ

うがひいてあったんだ。

丑は、おきあがろうとして、またひっくりかえった。あわてて、はじのほうへよろうとすると、両がわにならんでいた4年生が、まっぴりつきとばした。右へよると、右がわからつきとばすし、左へよると、左がわからつきとばした。そのたんびに、丑の大きなからだは、ドタリ、ドタリ、ひっくりかえった。

とうとう、丑は、四つんばいになって、やっとこっちへにげてきた。それを見て、4年生は手をたたいて、アハアハわらった。

丑は、かじ屋の子どもだった。頭がちっちゃくて、目がほそくて、からだだけ、わかいしゅみたいに大きかった。

丑は、つよいんだか、よわいんだか、だれにもわかんなかった。家では、父のむこうづちをうつくらいだから、ずいぶんちからがあるはずなのに、学校へくると、ちっちゃい、下の級の子どもにまで、ばかにされた。のろまなことと、がくものできないことがもとだった。

木村^{うしまつ}丑松という名まえだったが、だれも、丑ちゃんとも、丑松さんともよばないで、丑、丑とよびすてにした。

4年生は、ことにひどかった。ひまさえあると、丑をつかまえて、もてあそびもんにした。

丑は、どんなにいじめられても、泣き声ひとつたてず、なみだひとつぶ、こぼさなかった。ただ、ふだんでも青黒い顔が、よけい青くなるだけだった。

そんなときは、だれが話しかけても、1日、口をきかない。運動場のすみっこで、ぼんやり、じぶんのきたない足のゆびなんぞ、ながめて立っていた。

学校がえりに、丑とふたりきりになったことがあった。そのとき、いつも無口の丑は、めずらしく、おれに話しかけた。

「おら、学校やめべかとおもんだ。」

「なんで……」

「おら、ほうこうにいべとおもんだ。」

「ほうこうは、つれえもんだっちぞ。」

「学校だって、つまんねもん。」

「そんでも、ほうこうより、ましじゃねえかな。」

「なんしたって、おらみてえな、ばかじゃ、いいことはあんめえけど……」

おれは、丑が毎日学校で、みんなにばかにされていることを思いだして、かわいそうになった。それで、

「ばかだって、りこうだって、大っきくなりゃ、おなじこんだ。そんな気ださねで、しんぼうしなよ。あと半年だもん。いまの4年生が卒業すりゃ、こんだおれらが4年生だかな。そしたら、こんだ、いばってやんべよ。な、丑。」とやってやった。

丑は、いくらか気がはれたとみえて、うれしげに、コックリした。

学校の花壇は、ちいさくきって、ひとりひとり持ちばがきまわって、そこへ、じぶんのすきな花をうえて、そだてることになっていた。

丑の持ちばは、すみっこの、土のうすい、いちばんやせたところだった。丑はそこへどこからか、ダリヤの根をもってきてうえた。

ダリヤは、まもなく芽をだして、ヒョロヒョロと、あぶなげにのびたが、それでも、ときがくると、ちいさな花をつけた。

丑は、大よろこびで、水をやったり、手をくれてやったりして、せわをしていた。

ある日、フットボールが、花壇の中へとびこんで、ひとかたまりの4年生が、それをとりにかけこんできた。

ちょうど、丑は、花壇の草とりをしていたところだったので、だいじなダリヤを、ふみおられてはたいへんと、いそいでその前に立ちはだかった。

すると、4年生のひとりが、

「じゃますんな！」という、わざといじわるく、丑をつきとばした。

丑は、あぶなく、花の上に、しりもちをつきそうになって、四つんばいになってきさえたが、それでも、ヒョロヒョロした花は、もう、首のところから、くの字におれてしまっていた。

丑は、しばらく、ぼんやりそれを見つめていたが、ほそい竹をひろってきて、おれた花を、わらでもとどおりにくくつけた。

つぎの日、丑が花壇にきてみると、ダリヤは根もとからしおれかえっていた。おどろいて、しらべてみたら、いつのまにか、ダリヤは根がなくなって、くさだけが土にさしてあったのだった。

それから5、6日たって、4年生の花壇のまん中に、王さまのようにいばってさいていたカンナの花が、ひと晩のうちにしおれてしまった。

4年生は、大きすぎしてしらべると、根のところを、小刀かなんかで、スッポリ切ってあることがわかった。

いま思うと、だれがしたんだか、よくわからないんだが、そんなときは、3年のおれらまで、丑のしわざと思った。おまけに、そのカンナは、4年生のうち、一ばんいばっている、新屋の金ちゃんを持ちばだったから、よけいさわぎが大きくなった。

おひる休みに、4年生は、金ちゃんをまん中にして、運動場のすみで、なにかいっしんにそうだんしていた。おれらがそばにいくと、おっかない顔つきをしてにらみつけるので、どんなことがおこるのかと、みんな、ピクピクしていた。

それでも、学校がひけるまで、なにごともなかった。おれらは、ならんで門をでて、なみ水道をかえっていった。

台山だいやまの坂のおり口までくると、坂の下に、4年生がみんなかたまてまっていた。おれらは、ハッとして、そこへ立ちどまってしまった。

金ちゃんが、たったひとりで、大またに、おれらのほうへあるいてきた。そして、「丑！ おめえに用があるんだ。こっちさこう。ほかのやつらも、そこを動いごいちゃんねぞ。」といった。

おれらは、みんな丑の顔を見た。丑は、なんのこただかわかんないらしく、ぼんやりして立っていた。

「こっちさこうちんだ。」

金ちゃんは、大声でまたいった。

丑は、とびあがるように、ビクンとして、フラフラと前へ出ていった。

金ちゃんは、おとなみたいに、両手をこしにあてがって、ジロジロ丑の顔をながめていた。

おれらは、いきをつめて、ふたりを見くらべていた。

「丑、カンナ切ったな、おめえだっちものあんだが、ほんとか。」

金ちゃんは、おちつきはらって、ゆっくりと、ことばをきってきいた。

丑は、青い顔をしてっ立ったまんま、ひと口もきかない。丑のかた手にもっていたぞうりぶくろが、ポタリと下におちた。

「おめえのダリヤ切られたんで、そのしけえしに、カンナの根切ったんじゃねか。……ええか、ちく⁽²⁾ならちく、ほんとならほんとなんといってみろ。きょうは、どんなことしたって、いわせねじゃおかねんだかな。」

けれど、丑はやっぱりだまっていた。ききたくても、口が動かないらしい。ほったのあたりをピクピクさせながら、まっ青になって、棒のように立っていた。

おれらは、はやくなんとかいえばいいのにと思いながら、おねをドクドクさせていた。「いわねな、どうしてもいわねな……」

金ちゃんは、おどかすように、右手をふりあげた。

「かまあこたね。ぶちのめせ！ 金ちゃん。」

「そだ。このやろ、いい気んなってやがんだ。」

「ぶんなぐれ！」

「ぶんなぐれ！」

4年生のやつら、てんでにどなりだした。

金ちゃんは、つりこまれたように、げんこつをかためると、いきなり丑のよこつら、ガンとなぐった。丑は、丸太んぼのように、草の上にぶったおれた。けれど、どういはずみか、おきあがりこぼしみたいに、またピョッコリおきあがった。

おれらは、丑がむかっていくのかと思ったが、そんなようすもない。

「やろ、くやしゅか。くやしけら、はくじょうしろ。」

金ちゃんは、まちかまえていて、もういちどよこずっぽ、はりとばした。丑は、うけとめるつもりで、かた手をあげたが、まにあわないで、またしたたかぶたれた。ぶたれたまま、まわりを見まわした。にげるつもりだったらしい。

丑の顔は、へんにゆがんで、目がとびだすようにギロギロ光った。

金ちゃんが、3どめのげんこつをふりあげたときだった。とつぜん、丑は、ううっとうなって、ちからいっぱい、金ちゃんをつきとばした。

金ちゃんは、ふいをくって、杉の木の根もとにしりもちをついた。

これを見ると、4年生は、みんないちどきに立ちあがった。

「手だしすんじゃねえぞ。」と、金ちゃんがどなった。

「こんなやろ、おれひとりでたくさんだ。」

金ちゃんは、まっかんなっておこって、おきるよりはやく、5つ6つなぐりつけた。

丑は、金ちゃんにしがみついて、おしたおそうとした。どうしてちからをだすのかわからないように、ただ、むちゅうでおしていた。

金ちゃんは、足がらかけて、丑をねじたおした。そして、馬のりにまたがって、

「こんでもか、こんでもか。」といいながら、ドスドスンなぐった。

どうしたはずみだったか、上にのっていた金ちゃんが、みごとにはねかえされた。そして、こんどは丑が上になった。また金ちゃんがはねかえした。ふたりは、くみあったまま、土ぼりの中を、ゴロンゴロン、ころげてまわった。

金ちゃんは、大声でどなりたてていたが、丑は、はじめから、おしのようにだまりこくて、たたかっていた。

いまは、どっちが勝つか、だれの目にもわかんなかった。あんまり、はげしいけんかなので、おれらはおろん、4年生のやつらも手をだす元気がなかった。みんな、どうなることかと思って、わくわくしてながめていた。

どうとう、丑は金ちゃんをくみふせてしまった。

丑が勝ったのだ。

丑のかた手は、ギョウと、金ちゃんの首をおしつけて、むきだしになった、すりきずだらけのふとい両足は、金ちゃんのこしの上にふんばたかった。

「ちきしょうっ！ ちきしょうっ！ ちきしょうっ！」

いままで、ひとロもきかなかった丑は、つんぎくように、こうさげびだした。そして大きなこぶしで、金ちゃんをさんざんぶちのめした。

金ちゃんは、もうはねかえすちからもなくなって、なぐられるままになっていた。

気もくったように、なぐりながら、さげんでいた丑の声は、とつぜん、このとき泣き声にかわった。どんなにいじめられても、なみだひとつこぼさなかった丑は、勝ったい

まになって、おんおん、大声あげて泣きだしたのだ。

おれらは、あつけにとられて、そのようすをながめていた。



(1) 尋常科(小学校)を卒業した生徒のいく学校の3年生。

(2) うそのこと。

② 児童文学における千葉県三の功績と評価。様々に語られる千葉県三論からいくつか。

『改訂 現代児童文学史』より
(昭和36年5月25日・文教堂出版発行)

昭和時代
児童文学展望より
千葉県三

千葉県三*は、大正9年(1920)ごろから雑誌「童話」を編集する傍ら、始めは外国物の翻案などを書いたり、また川又慶次のペンネームで馬琴の「八犬伝」や「椿説弓張月」などを再話したりしていた。彼が創作童話を書き出したのは大正期の終りごろで、「虎ちゃん日記」「梅漬けの皿」などが代表作である。

その後、彼らの同人雑誌である「童話文学」や「児童文学」に彼は童話「地藏さま」「仁兵衛学校」「鷹の巣とり」「トテ馬車」「どろぼうとラッパ」「ある両親と子供の話」「ほそ道」「けんか」「定ちゃんの手紙」等34篇の作品を発表した。これらの作品が、いずれも

彼の少年時代を素材にしているものか否かは別として、そこには彼の少年時代への回帰があったといえよう。省三は少年のころ栃木県の日光街道のある村で過ごしたので、そこでの思い出を方言を用いてかいている。その素朴な作風は文学童話に新鮮なものをもたらした。彼の好んで描く村童はどれも伝習的で、みな善意で、澁刺としている。そして友愛、孤独、同情などをテーマとして、村童に特有なユーモアを描いて島木赤彦の童謡の世界を想わせるものがあつた。しかし、その後、省三は文学童話を書かず、少年少女向の時代小説をかいている。主著に童話集「トテ馬車」がある。

(以下略)

童画展望より

川上四郎

(省三の初期著作、雑誌「童話」で挿絵・表紙画を担当)

(前略)

川上四郎*は、大正9年(1920)「童話」という雑誌の2、3号から、その廃刊の日まで、表紙とさしえに画筆を揮っていた。彼の画風はリアルで素朴でしかも巧緻、その色感は優美で異彩を放っていた。

四郎は新潟県に生れたので北国の雪景と子供たちを描くと他の追随を許さぬものがあつた。そして彼は、そのころ住んでいた武蔵野の農村と村童をよく描いていた。だから村童といっても多分に都会的でナイーブなすがたをしている。そして彼は自然を背景としてえがくときは、芝居の書割りのように細部にわたって児童に興味あるような情景を細い横線で虚体として表現し、近景を実体として黒色を巧みに駆使して強く浮き出させた。この黒一色画の技法は彼の最も得意とするところであつた。彼の出現以前において、これほど挿画の技法を巧みに駆使し、しかも、その田園的の素材と童心の躍動と純真美を表出した童画家は彼をおいて他にはないといつてもいいすぎではないであろう。児童の情操陶冶のために健康なものを齎した功績を見のがしてはならない。

(以下略)



「綴方生活」第2巻第1号より
(昭和5年1月・東京文園社発行)

土の童話作家千葉省三論

川村 章



長塚節氏が、郷土小説『土』によって最高の權威たる
玲名を文壇にとどめ巍然たる泰山の如き地歩を確立した
るに、童話界に於て質実素朴よく野趣に富める風格を以
て郷土童話の白眉としての風韻を専らにしたるは千葉省
三氏その人である。

氏は今度その童話集『トテ馬車』を以て世論に問われ
ているが注目せねばならぬことであると思う。今更ながら
万人の魂の故郷に呼びかけられた作として驚きの眼を瞠
らざるを得ぬ私は、その尊仰からの感激大世に伝唱した

い感に森と迫られるのである。

譬えば野路の石地蔵の如く、児童にとっては忘れられぬ故郷であるところの『虎
ちゃんの日記』をはじめ11篇は一つ一つ尊い土の香の漲ったものとして、赫士のね
ばりと若菜の如き柔さと健かさと清新の香に陶然たらしむるものがある。自然の神のつ
く氣息でもあろうか森々と迫るサムシング、これ実に氏の風格である。

薄暗い土間に、爐がきってあって、トトロ火が燃えていた。

「坊ちゃん、どこへ行きやんす」と、おばあさんが、爐の火を直しながらきいた。

「勝木…」私は、小さい声で答えた。

「勝木は、学校さいくんじゃねえけ。なんでも、新しい校長先生がくるっち話だっけが」

私は、そっと、お父さんの方をふりかえって見た。

「やっぱり、そうだんべ。どうもおら、見たとこから、そうらしいと思ったんだ…そんじゃ、あす
こにいんのが校長先生なんだね」

私は、コックリうなずいて見せた。おばあさんは、急に大きな声で、裏口の方をむいて、
「善、善はいねえか」とどなった。

裏の戸がガラリとあいて、ちょうど私ぐらいの男の子がとびこんで来た。

「なんだ、おばあちゃん！」男の子は、膝から下むきだしにして、藁草履をはいていた。眼
のまんまるい賢こそうな子供だった。

「あすこにいるのが、こんど来た校長先生だぞ。おめえ、鼻汁かんで、行っておじぎして

来な」おばあさんは、ボロ切れで子供の鼻の下をふいてやった。子供は、赤い顔をして、もじもじしていたが、とうとう思いきったように外へ出て行って、お父さんの前に、ヒョコリと頭をさげると、大急ぎで又こちらへとんで帰った。

「なんち、ソソっかしいおじぎの仕様だ」

(乗合馬車から)

その素朴さ、雪を搔いて摘む冬菜そして村娘「菜摘む娘」の美しさと純朴さが湛えられているのではないか。彼の雪解けの朝に生々と新鮮さを味わわしむる若菜のじんめりとした光と色。それは土そのものの香であり、光である。ごそごそと粗い葉の面に置く紫を帯びた露の輝き。万物に魁して浅き春陽に萌え出でしこの葉は、限りなく生の充実をはからんとする。更新と充足巖かに巖かに伸び行く氏の生命は永劫に変わるなき自然の力そのものである。黙々の中に伸展躍動してとどまるなき生命の尊厳よ。かくて自然は黙雷する。

こないだ、大風が吹いた朝、おれが学校さでかけべと思うと、外の垣根んとこで、どなり声があるので、急いで出て見たら、お父ちゃんと、吉公と、とっくみあって大げんかしてるんです。おら、たまげちゃって、どうしていいかわかんなかった。お父ちゃんは、年寄だもんだから、吉公にかなわねえで、突っとばされて、ころんじゃった。その上さ、吉公がまたがって、ゴツンゴツンなぐるんです。おら、ワアワア泣きながら、吉公の帯つかまえてひっぱったけど、とても離れないんです。そんで、太い薪たんぼひらって、吉公の足、ぶんなぐったんです。そしたら、ポキンと音をして、吉公は、キャアと云ってひっくりかえりました。

おれは、急いで家ん中さ逃げこみました。

(定ちゃんの手紙から)

淡い天の夢に憧るるに対し、どっかと大地に生いたって深く深く掘り下ろうとする力の作。これは幼きときの追憶であり郷愁の閃きである。童心の永生への動きはそこだ。純心だ。

次の日、学校へ行くと、みんなおれのまわりさ寄って来ました。高等科の生徒まで集まって来ました。そして「おめえ、どんな薪たんぼでぶったんだ」だの「両方の手でふりあげたんけ片手でけ」だの「いくつぶんなぐった」だのって聞きます。おれがそんな時の話すると、みんな腹立てて

「吉公のやろ、ほんとに生意気なんだぞ。こんだ自動車来たら、とおせんぼしてやれ」なんて云っていました。

(定ちゃんの手紙から)

破邪顕正の力強き児童の正義心は如実に表現せられて、共鳴共感、感動せずにはいられぬのである。

氏の童話は、末梢的な官能的な都会の童話——温室の花ではないのである。窮極せるブルジュワ芸術として、世期末ダダイズムの表現としての見苦しい享楽主義の童話こそ、天を凝視して踏みすべらした不自然のものである。しかし、これ等の反動として生れたものではないのである。氏は云う「私はやむにやまれぬ内心の欲求から童話を創作す」と。童話は童心を把握しての上立つ芸術様式であると観る氏は、児童の為に児童に与えんとして童話を創作するのではないのである。作者の現実を掘りさげてがっしりとあたる人間本然の姿である童心に芽生えて童話は成長する。バタ臭き翻案や翻訳の童話でなく、日本の国土に生れ日本の国土に培れたもの、産土の答高き童話である。氏は書信に「小生の童話。都会人には見て貰いたくないし又見てもくれません。土の中から生えた童話として土に育っている人に見ていただきたい念願です」と述べられているが、氏の童話創作の態度が鮮明にうかがわれると思う。

8月12日

喜三ちゃんとおれと、草刈に行っていたら、そこさ、源ちゃんと作ちゃんが、大籠しよって上って来た。おれは、こないだのことでずいぶん怒っていたから「源公、おららの山葡萄盗ったな。お前だな！」と、大きな声で云ってやった。そしたら、源ちゃんは知らん顔をして「おら知んね、山葡萄は、猿だって食わ」と云った。すると、作ちゃんまで「そだ、山葡萄は、熊だって食わ」と口真似して云った。おれは、それで、作ちゃんも盗って食ったんだなとわかった。

弱虫の喜三ちゃんも、これをきくと、よっぽど腹が立ったと見えて、「ふん、猿は猿でも、そこらの禿猿だんべ」と云った。源ちゃんの頭に禿があるので、わざと、そう当てこすりに云ったんだ。源ちゃんは、こう云われると、真赤んなって「う」と呻ると、拳固をふりあげて喜三ちゃんにぶってかかった。喜三ちゃんは、あわてて、おれの方さ逃げて来た。「何だ！自分が悪いけに」と、おれは横から源ちゃんを、カいっばい突き飛ばした。源ちゃんはよろけて行って、ドタリと転んだっけが、急に、ワー と泣きだすと、片っぼの足首を抱えて突っふしちゃった。

おれらは、びっくりして傍へよって見ると、源ちゃんの足平から、血がドドド出ている。源ちゃんは転んだひょうしに、鎌を踏みつけたんだ。おれらはどうしていいかわかんなか

った。

「おらが、したんでねえぞ」と、喜三ちゃんが青い顔して、ふるえ声で云った。

おれはすこして、気がついて、帯を引きさいて繻帯こしらった。それから喜三ちゃんと作ちゃんに、血止草を集めらせて、それを傷口にあてて、しっかり巻いた。それから作ちゃんの帯とおれんのを結び合せて、源ちゃんをおぶった。ヒョロヒョロして倒れそうだったけれど、やっとこらえて作ちゃんと喜三ちゃんに後をおさえて貰って、そろそろと山を下りた。

途中で、作ちゃんに代ってもらった。おれと作ちゃんは、源ちゃんちの門口につくまで、一口も口をきかなかった。喜三ちゃんは、その間に何度も、ひとりで、「おらがしたんでねえぞ」と云った。

おれは喜三ちゃんが小憎らしくなった。

源ちゃんちへついて、おれは気がとがめて、中さはいれなかった。

「痛いかい、源ちゃん、勘弁してくんな、な、」おれは、その時泣きながら、作ちゃんの背中の源ちゃんにあやまった。源ちゃんは、まっ青な顔をしていたが、怒ってる様子はなく、「あんな、虎ちゃん。草場の端れに、^{あけび}通草めつけといたから、あれお前にやっから、山葡萄とったこと勘弁してくんな」と、小さい声で云った。

おれは、ほんとにとんだことしちまったと思って、溜息つきつき、草場へ、置いて来た籠と鎌をとりて帰って行った。
(虎ちゃんの日記から)

その生活その味その態度、田舎の児童のものである。「土から生れたる人」というものを見得るとすれば、この作家その人であろうぞ。心からにじみ出る純真さ素朴さ、敢てその語が方言であるからというのではない。心の底から溢れ出る土の香である。おお質実なる作家よ。氏の童話は峩々たる大山の風韻をもつ。連亘せる群山を伴って、その雄々しくくつきりした山容は、奥深い森厳さの迫る気韻を貯えている。そしてそれは鈍重な息苦しさでなく清澄の気の豊かな明快さである。涙なくしては読み下せぬ真実感！童心の如実の表現であるからである。森厳なる気韻にうたれるからである。

氏は「童話は民話にその経路を開く」と云われている。爐傍で火に手をかざしながら、「昔々お爺さんとお姥さんと…」と繰り返された民話。国民性の如実の表現である民話は社会発展の下積みの下積みに蠢き流れた物語である。民衆の動向であり自然そのものであるところの民話にこそ、土ににじみ出た光。産土の香は純朴に明快に漂い流れていた。児童の法悦境、人間の魂の故郷たるこれに源をひらく氏の童話の必然性は論を俟たぬのである。

凡そ成人の童話創作の態度は、児童のもつ夢幻幻想の世界を中心として児童と共に生活の遊神化を図ると、その過去生活を再現して児童の現実に心境的に合一するとの二つに大分することが出来る。天に向って伸びんとするものに対して地に掘りさげ

んとするものである。童心を把握して真土深く掘り下げんと鍬を揮うの態度実に後者に即するものであると思う。

私は、今住んでいる東京の郊外に、あられが淋しい音を立てて落ちてくる頃、ふとその西岡村の、お祖母さんの生れた家を思い出すことがあります。すると、それといっしょに、小さい時、お母さんから聞いた話が、きっと思い出されてくるのであります。

(梅漬の皿から)

児童の現実、それは成人にとっては過去生活の再現である。懐しいそして永劫忘れやらぬ郷愁の閃光である。そこに躍如たる童心の動きをみる。氏は土に生れ土に育てられし人、朗らかに清冽泉の如く土の挽歌をうたうにこよなき人材である。誰かこの童心豊かなる土の作家に追従するを得べき、氏の偉大なる価値は茲に存するのである。

③ 千葉県三の生きた時代を年譜で概観してみっぺ。

『日本児童文学大系15・「千葉県三」』より
(昭和52年11月20日・ほるぷ出版発行)

千葉県三年譜

鳥越 信 編

明治25年(1892)

12月12日、栃木県河内郡篠井村にある母の実家で、父・亀五郎、母・はまの長男として生まれる。父・亀五郎は、宮城県栗原郡若柳町の出身で、何かの事情から郷里を離れ、小学校教師の資格をとって最初に赴任したのが篠井村の尋常小学校であった。(千葉県三全集第1巻「父母の記」参照)

明治27年(1894) 2歳

父・亀五郎、上都賀郡今市町字吉沢(現在は今市市)の吉沢尋常小学校へ校長として転任。省三の最初の記憶は、日光街道の杉並木のかげからはじまる。

明治28年(1895) 3歳

弟の芳男誕生。



明治30年(1897) 5歳

弟の寛誕生。

明治31年(1898) 6歳

この年の4月、父が校長をつとめる吉沢尋常小学校の2年生に編入学。つまり、ふつうの年令より1年上の学年へ入ったことになる。父はそれが自慢のたねだったらしいが、本人はからだが小さかったことと、算術が苦痛で子ども心になやんだ。このころから、母の実家の蔵の中で、いとこが読み古した巖谷小波の「こがね丸」、尾崎紅葉の「狭黒児」、桜井鷗村の冒険小説などを読みはじめる。また、父が今市で買ってきてくれた小波の「日本お伽噺」「世界お伽噺」なども記憶に残っている。

明治32年(1899) 7歳

省三が3年生のとき、父は上都賀郡南押原村(現在は鹿沼市)の楡木尋常小学校長に転任、以来20年間、この地に住みついた。その転校の様子を描いたのが「乗合馬車」で、省三の村童ものと呼ばれる作品の多くはこの楡木を舞台としている。

明治33年(1900) 8歳

この年、弟の寛が病死する。はじめて人の「死」に直面した。

明治34年(1901) 9歳

南押原高等小学校へ入学。1年早い上に人一倍背が小さかったので、「^{まめしょう}豆省」とあだ名をつけられる。

明治38年(1905) 13歳

4月、県立宇都宮中学校に入学、宇都宮市に下宿した。この年の秋、1、2年生が日光へ修学旅行に行き、帰って紀行文を書いたが、省三の書いた文章が同窓会雑誌に当選したため、当選者の出なかった2年生の反感を買い、教科書をストーブに投げこまれるという事件があった。この時の文章が宇都宮中学校同窓会発行の『同窓会雑誌』第17号(明治38年12月10日)に掲載された「修学旅行記」で、同じ号に「立秋の一日」と題する文章も掲載されており、おそらく活字になった省三の文章では最初のものと考えられる。なお、この『同窓会雑誌』には、ひきつづき「^{かじか}霊廟」「わくら葉」(18号)「老旅」「河鹿の巻」(19号)、「^{かじか}菫蕪屋」(20号)、「神経衰弱歌」「彼の日の日記」(21号)などが掲載されている。ところで、省三の紀行文が入選したとき、その選者が同校の5年生で、同窓会幹事をしていたのちの歌人、半田良平だったところから、良平の知遇を得た省三は、和歌や小文をつくることに興味をもつようになる。

明治40年(1907) 15歳

小学校時代から体力弱小のために劣等感を感じ、身にしみていたので、宇中柔道部

に入部。『同窓会雑誌』によると、のちには部の役員にもなっている。また、このころから、半田良平の指導で、『文章世界』『秀才文壇』などに和歌や小文を投稿、数回入選した。

明治43年(1910) 18歳

3月、宇都宮中学校を卒業。政治家を志して旧制第一高等学校に入るべく受験の準備中、悪性の盲腸炎にかかり、楡本の家で1年間、病床につく。

明治44・大正元年(1912) 20歳

医師のすすめで上級学校進学をあきらめ、母校・楡木尋常小学校および同郡内の磯尋常小学校で、3年間、代用教員をつとめる。

大正2年(1913) 21歳

徴兵検査を受けたが、丁種で兵役免除となる。

大正3年(1914) 22歳

代用教員をやめ、半田良平をたよって上京、良平の紹介で本郷元町の出版社・日月社に入社、雑誌『新公論』の編集に従事した。しかし、同社はこの年の末につぶれ、社主の紹介で麴町富士見町の植竹書院編集部に入社。植竹書院は翻訳書の出版で知られていたが、ここで省三は相馬泰三、鈴木悦、広津和郎などを知る。また、このころ、画家の安藤兵一などと、ガリ版刷りの同人雑誌をはじめめる。

大正4年(1915) 23歳

植竹書院も1年足らずでつぶれ、浪人生活を余儀なくされる。

大正6年(1917) 25歳

5月、増淵サダと結婚。6月、画家の万鉄五郎の紹介で、小石川林町にあったコドモ社に入社。絵雑誌『コドモ』の編集にあたる。コドモ社は、木元平太郎が社主で、他に雑誌『良友』を発行しており、その責任者は中村勇太郎だった。また、画家の川上四郎、河目悌二、田中良、芳野尚方、それに前述の万などが関係しており、童話作家千葉省三を生みだす母胎となった。

大正7年(1918) 26歳

4月、それまで田舎に暮していた妻の貞子が上京して、大塚窪町に世帯をもつ。この年、社主の木元から新雑誌発行の相談を受け、気もちは動いたが、まだ自信はなかった。しかし、この年の7月、『赤い鳥』が発行されたときには新鮮な驚きを受け、つづいて『おとぎの世界』『金の船』が出て、ようやく新雑誌への腹がきまる。

大正8年(1919) 27歳

3月、長男光太郎誕生。この年、中村勇太郎が退社し、浜田広介、水谷まさるが入社。

大正9年(1920) 28歳

かねて計画の新雑誌『童話』が4月に創刊された。田中良の表紙で、巻頭には相馬泰三の長編「桃太郎の妹」をのせ、省三自身は童謡「めくら鬼」と、童話「沙漠の宝」を書いた。このころ、省三は「トム・ソーヤーの冒険」や、ソログープの「影絵」などが好きで、その影響を強く受けていたが、そうした理念を誌面に出すために外国雑誌をあさったり、小川未明や島木赤彦をたずねて協力を依頼したり、苦心をつづけた。この年、滝野川町中里に移転する。

大正10年(1921) 29歳

11月、次男晨誕生。

大正11年(1922) 30歳

上荻窪に移転。川上四郎の隣りだった。6月、長男光太郎病死。

大正13年(1924) 32歳

この年、川上四郎のすすめで、真宗の一派、阿弥陀宗仏門の信仰に入る。直接の動機は長男の死であったが、このことは以後の文学とは無関係だと省三自身は考えている。

大正14年(1925) 33歳

3月、三男章誕生。10月、母はま、60歳で亡くなる。

大正15・昭和元年(1926) 34歳

『童話』7月号で廃刊。

昭和2年(1927) 35歳

5月、次女まさ子誕生。この年、酒井朝彦、水谷まさるの3人で同人雑誌を計画、小川未明、坪田譲治、浜田広介、北村寿夫を加えた7人で第1回の会合をもつ。しかし、同人費の点などで話はまとまらず、酒だけ飲んで解散した。

昭和3年(1928) 36歳

けっきょく、省三、朝彦、まさる、寿夫の4人だけで同人雑誌を出すことになり、7月、『童話文学』を創刊。省三はこの号に「鷹の巣取り」「どろぼうとラッパ」の2編を書いた。

昭和4年(1929) 37歳

6月、処女童話集『トテ馬車』が古今書院より出版される。同月、川上四郎ら15、6人と朝鮮を旅行。途中、省三はクラゲに中毒してひとり先に帰る。12月、長編幼年童話『ワンワンものがたり』が金蘭社より出版される。同じ月、四男晃誕生。

昭和6年(1931) 39歳

11月、『童話文学』廃刊。このころから、原稿だけの著述生活は目に見えて苦しくなっ

てきた。そうしたときに、水谷まさるを通して、講談社の『少女倶楽部』が、『童話文学』の同人に新しいタイプの少女小説を求めてきたのが機縁で、長編時代小説「陸奥の嵐」が、同誌の昭和7年1月号から12月号までに掲載された。また、この年の4月には、平凡社から最初の翻訳単行本『西遊記物語』が出版されたが、これもまた生活の苦しさを物語っている。

昭和7年(1932) 40歳

3月、第二童話集『葱坊主』、4月、第三童話集の『地藏さま』が、古今書院より出版される。

昭和8年(1933) 41歳

3月、長編時代小説『陸奥の嵐』が、講談社より出版される。

昭和10年(1935) 43歳

11月、『童話文学』の後継誌として『児童文学』を創刊。こんどの同人は千葉省三のほか、酒井朝彦、伊藤貴麿、稲垣足穂の4人だった。省三は創刊号に「みち」を書く。

昭和12年(1937) 45歳

3月、『児童文学』廃刊。

昭和13年(1938) 46歳

2月、第四童話集『竹やぶ』が古今書院より出版される。

昭和18年(1943) 51歳

4月、新潟県南魚沼郡湯沢に単身疎開する。仏門の縁故によるものだったが、ほぼこのころから、旧作の再版、および翻案・絵本などをのぞくと、結果として創作の筆を断つことになった。

昭和19年(1944) 52歳

4月、家族もすべて新潟県へ疎開する。

昭和20年(1945) 53歳

3月、父・亀五郎、足利市外の弟の家で、77歳で亡くなる。

昭和31年(1956) 64歳

新潟市旭町に移転。

昭和33年(1958) 66歳

東京都北多摩郡小平町鈴木新田に移転。ふたたび東京での生活がはじまる。

昭和34年(1959) 67歳

10月、北多摩郡小平町小平学園東区(現在は小平市)に新居を建て、移転。この年ごろから、千葉文学の再評価の声が高くなる。

昭和42年(1967) 75歳

長年の児童文学への功績により、第2回児童文化賞(モービル石油主宰)を受賞。10月より、岩崎書店から『千葉県三童話全集』全6巻の刊行開始。

昭和43年(1968) 76歳

3月、『千葉県三童話全集』全6巻完結。5月、上記全集が第15回サンケイ児童出版文化賞の大賞を受賞。

昭和50年(1975) 83歳

10月13日午後4時10分、心不全のため、小平市の桜堤病院にて永眠。10月15日、自宅で葬儀を執行。戒名、願行院釈徹信。

④ 雑誌「童話」復刻版の特別付録からも千葉県三論と、素顔と作品一覧を。

雑誌「童話」復刻版 別冊〈解説・執筆者一覧〉より
(昭和57年3月1日・岩崎書店発行)

雑誌「童話」の特色

——児童文学史上の位置——

鳥越 信

雑誌「童話」が、「赤い鳥」「金の船」(のちに「金の星」と並んで、わが国大正期を代表する有力な児童文学雑誌の一つであったことは、すでに広く知られている。菅忠道は、『日本の児童文学』(大月書店、1956年)の中で、次のように述べていた。

「赤い鳥」によって童話・童謡流行の風潮が生れると、類似の童話雑誌がつぎつぎに刊行されだしてきた。

(中略)

童話雑誌は、それぞれ中心的な詩人・作家・画家を呼物にしていた。「赤い鳥」が清水良雄の表紙や口絵・挿絵で特色を出していたように、「童話」では川上四郎、「金の星」では岡本帰一の童画が、人気を呼んでいた。三重吉と白秋が「赤い鳥」に拠っていたように、「童話」では、小川未明の童話、西条八十の童謡が人気の中心であり、「金の星」には野口雨情の童謡、沖野岩三郎の童話が毎号のように掲載された。だが、大正期の童



心主義を代表した雑誌は、やはり「赤い鳥」と「童話」であった。新人を育てたという点では、「赤い鳥」は主として童謡に功績をあげ、投書家のなかから昭和期を代表する多くの童謡詩人を送り出しており、また「童話」の投書家からは今日の中堅的童話作家がかなり出ている。

また、関英雄は、『日本児童文学大系』第2巻(三一書房、1955年)の〈解説〉において、

大正後期(大正7-15)の9年間は、正しく「童心文学開花」の時代である。(中略)同期の児童文学の中心雑誌たる『赤い鳥』『童話』『金の星』を中心に、主な作家と作品をめぐる、児童文学思潮のあらましを見て行くことにする。

と述べ、以下3誌の具体的な内容に筆を進めているが、ここでも菅忠道と同様、「童話」は「赤い鳥」に次ぐ第2位にランクされている。

「赤い鳥」の創刊が大正7年7月、[金の船]の創刊が大正8年11月、「童話」の創刊が大正9年4月で、3誌の中では「童話」は最もおそいスタートを切っているが、その間すでに、「おとぎの世界」(大正8年4月)、「こども雑誌」(大正8年7月)といった、やはり大正期の児童雑誌としては見落とすことのできないいくつかの雑誌が出ており、そうした流れの時間的順序からみると、雑誌「童話」は、「赤い鳥」によって幕をあげた大正期の芸術的童話・童謡運動のいわば後衛的立場に位置していたといえる。

にもかかわらず、「童話」が「赤い鳥」に次いで、あるいは「赤い鳥」と並んで高く評価されるのは何故なのか。もちろん、雑誌「童話」に掲載された童話・童謡そのものの価値、さらに菅忠道の指摘する新人作家の育成とその必然的結果としての後世への影響、の2点によるものであることは疑いもないが、実はそうした成果を保証した前提があったことを見落としてはならない。

もともと、この大正期の芸術的童話・童謡運動の先駆者と見なされる「赤い鳥」自体も、決して偶然の所産として誕生したわけではなかった。菅忠道の『日本の児童文学』にも見られる通り、新しい童話・童謡の出現をうながす「気運は、ふつつつとたぎりはじめて」おり、「その気運をまとめあげ、もりあげる組織者」として、「鈴木三重吉が、その役割をになうことになった」のだった。

では、そのふつつつとたぎりはじめた「気運」とは何だったのか。この点については、前出菅忠道、関英雄をはじめ、すでに多くの人々が共通して指摘している通り、

明治の半封建的な富国強兵策に対応するお伽噺、教訓小説、武俠小説などに対して、西欧デモクラシーの移入、とりわけ新しい教育思潮を軸とした童心の解放に対応する新しいタイプの児童文学への期待こそ、一口にいてその「氣運」を形成したものであった。

その具体的なぎざしは、大正2年2月、実業之日本社が刊行を始めた『愛子叢書』全5冊からはじまる。雑誌の面では、「コドモ」(大正2年12月)、「子供之友」(大正3年4月)、「新少女」(大正4年4月)、「良友」(大正5年1月)、「少女号」(同年12月)などの創刊がそれに当る。つまり、「赤い鳥」はこうした新しい児童文学への胎動を踏まえ、その一つの集成として結実したものであった。

こうした前兆の中に、「童話」の出版元コドモ社が、すでに「コドモ」及び「良友」を出すことによって参加していた事実は、注目に価する。コドモ社の沿革やまた社主の木元平太郎についても、したがって「コドモ」「良友」発刊のいきさつ等についても、残念ながらそれを知る資料や文献は殆どない。ただ、はじめに幼児対象の「コドモ」を出し、つづいて小学校中級向きの「良友」を出してきたコドモ社にとって、当然、小学校上級向きの雑誌刊行の計画は、将来構想の一つとして視野に入っていたにちがいない。

このあたりの事情について、「童話」の編集の中心であり、かつ執筆者としても活躍した千葉省三は、『新選日本児童文学』第1巻(小峰書店、1962年)に寄せた「あのころのこと」の中で、次のように述べている(引用は『千葉省三童話全集』の第1巻による)。

私がコドモ社にはいったのは、大正5年の末ごろのことで、たしか画家の万鉄五郎さんの口ききであったように思います。(中略)私はそのころ絵雑誌の『コドモ』の編集者が欠員になっていましたので、その穴うめとして採用されたというわけでした。

今から思うと、時代ものんびりしていましたし、社も個人経営の気安さもあつたのでしょう。入社して1年あまりたったら、社主の木元さんから、絵本づくりだけでは張り合いがないだろうから、何か新しい仕事をやってみる気はないかと勧められました。今出ている2雑誌でかなり安定性をもって来たり、少しは道楽してもいいのだがという話なのでした。そのときは、まだまだ自信がありませんからといって辞退したのですが、心の底に動いているものがありました。

(中略)しかし、なんといっても本当に腹がすわって、社主の木元さんの前に新雑誌の案を持出すようになったのは、『赤い鳥』が出て、つづいて『おとぎの世界』や『金の船』が現われてからのことです。

たしかに、「童話」創刊の直接の引きがねになったのは、「赤い鳥」の創刊であり、「おとぎの世界」や「金の船」のあいつぐ創刊であったことは事実だが、それより以前に「心の底に動いているもの」があり、それが「コドモ」「良友」の延長線上に考えられていたこともまた事実である。そうした意味で、「童話」が単に「赤い鳥」や「金の船」の成功によって、その後追いをのみ意図した雑誌ではなかった点を、私たちは重く受けとめなければならない。

その点で、「赤い鳥」の鈴木三重吉が、「童話」を単なる「赤い鳥」の〈マネ雑誌〉と評したのは、大正中期の童話・童謡運動へ至る歴史的な胎動の流れを全く無視した暴言といえよう。『鈴木三重吉全集』（岩波書店）の第6巻に収められた書簡によると、三重吉は大正7年12月7日の小宮豊隆宛書簡にはじまって、昭和8年12月15日の征矢兵馬宛書簡に至るまで、清水良雄、小池恭、成田為三、高橋幸高、加計正文、小笠原清次郎等々にあてた書簡の中で、かなり八つ当りの批判、というより非難を加えている。

またこの間、「おとぎの世界」の大正9年5月号には、同誌の編集者にあてた「類似雑誌に対する非難」なる三重吉の文章も掲載されている。大正9年5月といえば、「童話」創刊の時期と殆ど同時なので、この文章の中で〈マネ雑誌〉〈模倣雑誌〉〈お猿〉などと痛罵されているものの中に、「童話」も含まれているかどうかは微妙なところである。

ただ、大正9年4月18日の小池恭宛書簡の中では、三重吉は「赤い鳥のマネ雑誌、オトギの世界、金の船、お話、コドモ雑誌、童話とどうとう5つ出来ました」と述べているので、出たばかりの「童話」もまた、「おとぎの世界」や「金の船」と同様、三重吉の目の仇にされたことが明瞭である。

しかし、すでに述べた通り、「赤い鳥」創始者としての三重吉のプライド、また人一倍強かったといわれる三重吉の性癖などを考慮に入れてもなお、こうした非難は全く一方的な独断と偏見といわざるをえない。少くとも「童話」に関するかぎり、「コドモ」「良友」との内容的関連は明らかであり、結果としての創刊はおそかったかもしれないが、それへの萌芽はすでに大正2年から5年ごろにかけて内在していたと見るべきである。

それでは、「童話」の特色はどこにあったか。さまざまな側面はあげられるにしても、やはり最大の特色は、千葉県三が編集の中心にいた、という点にある。千葉県三が「童話」の編集にたずさわった経緯については、先に紹介した通りだが、その「あのころのこと」と題する文章の中で、省三自身は「童話」がめざした方向を、次のように書い

ている。

大正7年の秋『赤い鳥』が初めて発行されて、それを手にしたときにはさすがに驚かされました。あの、ずらりとならんだ豪勢な寄稿家の顔ぶれといい、表紙やさし絵にしみ出ている、どこことなく生き生きとした清新な味わいといい、在来の児童雑誌の形式を踏まえて、そこからの一步前進を考えていた私のプランなどは、大ぐらつきにぐらついたわけです。でも、同時にいくつかの疑問もありました。この寄稿家の顔ぶれがいつまで続くだろうか。この人たちが、はたしてどれほどの熱をもって執筆してくれるか。創作童話を生むというより、文壇人に書かせるということの方に力を入れているらしいが、新運動としてこれでよいだろうか、などという点でした。(中略)

そんな考えを往復吟味しているうちに、私たちの新雑誌の構想もようやくまとまってまいりました。まず第一に、厳正な意味での創作童話を必ず巻頭にのせようということ。これは雑誌の主調をつくり、『赤い鳥』と違った色合いを出すためにもぜひ必要であると思われました。次に、ほんとうに童話童謡に打ちこんで書いてくれる新人を探し出すこと。これもはたしてそういう人が見つかるかどうか未確実な話でしたが、雑誌の使命の上からいって、既成作家より新人の出現に期待をかけるべきだと思いました。第三に、日本の土に生まれた郷土性のある童話童謡を尊重しようということ。土は伝統ですし現実です。日本の子供は日本の土を踏んで育つのですから、創作童話童謡も又その土に根ざしたものでなければならないと思いました。最後に誌名を『童話』とすること。

ここでもまず、「赤い鳥」創刊より前に、省三の中に一つの〈プラン〉があったことが語られているが、そのプランも「赤い鳥」の出現で、一度はぐらついた。しかし、同時にいくつかの疑問もおこって、その結果がここに述べられた4つの点となってまとめられた。そのいずれもが、「赤い鳥」とは〈違った色合い〉を出すためで、やはりその意味では、先行した「赤い鳥」への意識が、いやおうなしに存在していたことがわかる。

こうして出発した「童話」だったが、その創刊号の出来ばえについて、省三はつづけて「いかにもしろくたくさく、在来の幼少年雑誌にくらべては貧弱に見え『赤い鳥』や『金の船』等の新雑誌にくらべるとやぼったく、いくら欲目で見ても上出来とはいわれませんでした」と書いている。実際どうであったかは、「赤い鳥」と「童話」のそれぞれ創刊号をくらべてみて、人それぞれの感想を持つにちがいない。

ただ、例えば、それぞれの創刊号に掲載された《創刊のことば》一つをとりあげても、内容の優劣はともかくとして、両者の性格のちがいが、つまりは鈴木三重吉と千葉省三のちがいのようなもののはっきりと出ているのはおもしろい。「赤い鳥」の《創刊のことば》はあまりにも有名だが、あの文壇作家を総動員しようと意気込んだ、事実初期のころにはその意図をある程度はたした、豪華絢爛たる顔ぶれの誇示をはじめ、文章には絶大の自信を持っていた三重吉の、並々ならぬ決意と自負をつらねた格調の高さにくらべて、「童話」のそれは6項目のモットーを箇条書に記したばかりの、きわめて事務的でさえある文章にすぎない。

しかし、この2つの《創刊のことば》は、よくも悪くも2つの雑誌に対する印象を、対照的にきわだたせる効果をもつものといつてよい。たしかに省三のいう通り、「童話」のそれはいかにもしろうとくさく、やぼったい感じを抱かせる。

それでは、かんじんの中味はどうであったか。先の菅忠道、関英雄はともに大正期（特に後半の）児童文学全体を〈童心主義〉としてくくっているが、この点についてはすでに古田足日をはじめ多くの疑問や意見が出ている。とりわけ、説話系の作品が多かったという側面から見ると、むしろ全体の特色はそちらの方に色こく出ている。

例えば、「童話」の創刊号からしばらく巻頭を飾った相馬泰三の「桃太郎の妹」などは、その典型的な例といえよう。

千葉省三によれば、巻頭に創作童話をおくということは、先の4つの目標の第一にかかげられた点だったが、実際には例えば当時の創作童話の第一の書き手と目された小川未明は、すでに「赤い鳥」や「おとぎの世界」の常連であり、浜田広介は同じコドモ社の「良友」を担当していてこれも無理、けっきょく数年前に植竹書院からすでに単行本として出していた『桃太郎の妹』を、苦肉の策として登場させたと語っているが、そうしたいきさつはともあれ、この作品もまた説話系に属するものであったことは否定できない。

したがって、たしかに「赤い鳥」「金の船」「童話」の執筆者たちは、画家や詩人も含めて、それぞれに専属的な結びつきがあり、それらの執筆者による色わけが形の上では比較的はっきりしているように見えながら、しかし全体としての作品傾向は、圧倒的に説話系列によって占められており、それはまた、この機運としては新しい児童文学を生もうと苦闘していた時代の、混沌とした状況の反映でもある。

それが、人脈という形の上だけでなく、実際の作品の上でもはっきりと「童話」の特色として打ち出されてくるのは、やはり何といっても作家千葉省三の登場によってである。省三はすでに創刊号に童謡「めくら鬼」を発表するなど、書き手としてもかかわりを

持っていたが、童話の方では創刊3冊めにあたる大正9年6月号に発表された「に王とか王」からである。

つづいて「たまの落としもの」(同年7～9月号)「拾った神様」(同年10月号)が書かれるが、この「拾った神様」あたりから、省三のいう「土に生まれた郷土性のある童話」への志向がはっきりとあらわれてくる。それからしばらくは、「空へ落っこちた話」(同年12月号)「機関車と月の話」(大正10年7月号)「五右衛風」(大正11年5月号)といった、ハイカラさ、ナンセンス、落語的ユーモアなどのいりまじった軽妙かつ幻怪な作品と、「十銭」(大正10年5月号)「化猫退治」(大正11年10～11月号)といった、郷土的発想に根ざしながら、子ども特有の心の動きをリアルに描いた作品と、2つの系列が交錯する。

そして、前者はその集大成ともいべき幼年童話の傑作「ワンワンのお話」(大正12年4月～13年1月号)へ、後者はその結実ともいべき代表作「虎ちゃんの記事」(大正14年9～10月号)の誕生へとつながっていく。「ワンワンのお話」は、のちに単行本『ワンワンものがたり』として出版され、今日なお多くの読者をもちつづける幼年童話の古典となった。また「虎ちゃんの記事」も、いわゆる村童ものの代表として、同様の古典的評価を得ている。

こうして千葉県省三が、「童話」の中心的執筆者として、新しいタイプの幼年童話と、はじめて生きた子どもをリアルに活躍させた村童ものの出現によって、比類ない個人的な作品世界を確立させたことで、雑誌「童話」もまた、「赤い鳥」などとは一味も二味もちがった個性と特色を持つに至った。とりわけ村童ものと呼ばれる一連の作品は、従来の説話的世界——たとえそれが、大正期的な新思潮による解釈をもっていたとしても——のもつ古さに比して、省三自身の少年時体験と結びつく郷愁的な部分をも含めて、それら子どもたちがヴィヴイドに紙面に躍動する新鮮な感動と共感、今日もいささかも衰えはしていない。

皮肉なことに、省三によって開かれた新しい児童文学の地平線は、省三が創作童話の第一人者と目していた小川未明とも、全く異質の世界だった。同様にユーモアと機智とナンセンスと物語性に富んだ幼年童話も、情緒的な美意識と外形上のリズム感だけで成り立つ浜田広介のそれとは全くかけはなれていた。その意味で、創作童話を必らず巻頭にのせること、ほんとうに童話童謡に打ちこんでくれる新人を探し出すこと、を念願とした編集者省三の夢は、自分自身が書くことによって果たされたわけである。

また、第三の目標であった〈土に生まれた郷土性〉という点も、村童ものという文字通り土に密着した、土の中から生まれた作品の出現によって果された。そう考えてくる

と、省三が新雑誌創刊のために構想していたプランの中に、実は無意識のうちに作家千葉省三として構想していた作品世界が、そのまま前提されていたことがよくわかる。

作家千葉省三によって「童話」の特色が出てくると、おかしなことに、それまで人脈こそ異っていても、作品世界としてはそれほどちがったものに見えなかった部分まで、一つの特色を持ちはじめてくる。「童話」の人脈は、画家や詩人をのぞいて、浜田広介・北村寿夫・相馬泰三などに代表されるが、このうち従来とりあげられる機会の多かった広介はともかく、寿夫や泰三などは、その後省三の児童文学仲間となった水谷まさる・酒井朝彦などと共に、今後はもう少しきめ細かに、個別的な評価と位置づけが必要となるだろう。そしてそのことが、「赤い鳥」や「金の船」とのちがいを、いっそうきわだたせることになるだろう。

しかし、そうした部分への目くばりをうながすのも、結局は千葉省三というきわめてユニークな存在が、「童話」の中心にすわっていたためである。雑誌「童話」を特色づける諸要素はさまざまであるが、何といてもこの雑誌を語る時に省三を抜きにしては出来ない。第二次世界大戦後、省三に対する再評価の声が高いが、その古典的不易性が認められれば認められるほど、それにともなつて雑誌「童話」への評価が高まることは、必然的な帰結といわなければならない。

父のあの頃

千葉まさ子(省三の次女)

冬の夜です。

「オーイ、原稿よんできかせるから、みんなきいてくれ」

「パパちゃんが呼んでるよ」

わたしたちきょうだいは、一勢にコタツからとび出して、縁側をはしります。

父の書斎。机の脇に据えられた大きなシナ火鉢に、兄や姉はしたり顔に手をかざし、わたしはせいっぱい、手をのばします。

父は、書き上ったばかりの原稿を手にして、しきりに黙読して居ますが、顔を上げると、「晁はここにおいで」

弟はいつも、父の膝許です。

「オーイ、かあちゃんはどうしたんだァ」

ぎりぎりまで繕い物に取り組んでいた母が、アタフタとかけつけて、子ども等の輪の間に膝を割りこませます。

紐で吊り寄せた電燈が、父の頭の上で鈍く光ります。

父は咳払いをひとつすると、すこしのどにかかった声を抑えるように表題を読み上げてから、

「まあ、きいてくれ。こういう話なんだ」

そう言って、本文に読み入って行きます。

わたしたちは、はじめのうちは、髭の生えた父の口許がモゾモゾうごくのを珍しそうに眺めています。が、じきに物語の中に引きこまれてしまいます。父の声は高くなったり、と思うと低くなったり、時には間をおいたりして、わたしたちを落ち着かなくさせます。父が指先をなめてハラリと原稿をめくる度に、物語が、どんな展開を見せるのかと、胸がドキドキします。

「おしまい」と、最後の頁を読みおえると、父は読み重ねていった原稿を逆に重ねなおしながら、

「どうだ。面白かったかい」

と、みんなの顔を見まわして、たずねます。

「ウン、とても面白かった」

わたしたちは口々に答えます。

「かあちゃんはどうだった」

「いいじゃございませんこと」

「そうか、いいと思うか」

父は、やっとひとしごと終えたせいか、ニコニコ気嫌のいい顔をして、

「じゃ、みんな、もうおせいから、おやすみ。晨(長兄)もあまり夜更しするんじゃないぞ」

「おやすみなさあい」

わたしたちはまだ、物語の世界からすっかり抜けきれずに、ぐずぐずと腰を上げます。

父はこれからまだ起きているんです。母も再び繕い物にとりかかります。子供時代、わたしたちは、父や母がいつ床に入るのか、知りません。

* * *

ゆうべの雨がカカリとあがって、ぬれた庭木も昼近くには大分乾いて来ました。

「かあちゃん、イチヂクとるから、入れ物もってきてくれ」

父がガタピシとガラス戸を開け放しています。手すりにつかまって見ると、すぐ目の前のイチヂクの枝には、あかく口をあけた実がすっかり熟れています。

入れ物が来た時には、父はもう手すりをのりこえて、イチヂクの木にとりついています。「パパちゃん、気をつけて下さい。ぬれているから、すべりますよ」

母が心配して声をかけると、

「ウン、大丈夫だ。やあ、中まで雨が入っちゃってるな」

父の手にはもう、大きなイチヂクの実が、もぎ口から白い乳をたらしながら、2つ3つのっかっています。

「よいしょ。なかなかすべるぞ」

父は足もとを気にいいい、幹から太い枝にのり移って、顔を仰向けたり、横っちょの方へ体をねじまげたりして実をもぎります。

「ほら、パパちゃん、頭の上。それからしろの方。ちがうよ。もっとこっち」

わたしたちも夢中になって応援します。

離れた枝にとり進むと、母のさし出す筈はもうとどきません。すると父は、もいだイチヂクを懐の中に入れてみえます。

「もういいかげんにおやめなさいよ。パパちゃん。あーあ、それじゃあ、着物がたまったものじゃないわ」

「あとはあしただな」

父はまわりを眺め渡すと、

「じゃ、かあちゃんの言うことをきいて、やめるとすっか」

そう言って、懐のイチヂクをつぶさないように、ソロソロともどって来ます。

すごい。筈に2杯も。口のあいたのやら、口はあかないけれど、ハチハチに皮がはじけかけているのやら。

「こりゃ、とても食べきれないぞ。かあちゃん、又ジャムにでもするか」

「それもいいわね」

このイチヂクの木が倒れてから、もう40年になります。

「童話」執筆者索引より

千葉県三の掲載作一覧

めくら鬼	(童謡)	大9.4(1-1)	
砂漠の宝	(物語)	〃	
たんぼぼおじい	(童謡)	大9.5(1-2)	
ピーターの靴	(物語)	〃	
麦の葉かげ	(童謡)	大9.6(1-3)	
に王とか王	(童話)	〃	
拾ったおかちゃん	(朝鮮の童話)	〃	
たまの落しもの(1)~(3)	(物語)	大9.7~9(1-4~6)	
拾った神様	(〃)	大9.10(1-1~7)	
空から落っこちた話	(〃)	大9.12(1-9)	
一刀流の元祖	(〃)	大10.1(2-1)	
釜わり典膳	(〃)	大10.2(2-2)	
風のいたずら	(〃)	大10.3(2-3)	

大正15年4月の「童話と童謡の会」
出演者らと
(千葉県三は後列左から2人目)

光ちゃんとお母さん (物語) 大10.4(2-4)
 十銭 (〃) 大10.5(2-5)
 機関車と月の話 (〃) 大10.7(2-7)
 蠟燭 (〃) 大10.8(2-8)
 炭やきごっこ (〃) 大10.9(2-9)
 お風呂もらい (〃) 大10.10(2-10)
 赤んぼのほりもの (〃) 〃
 カルと仔麩の話<1>~<2>(再話) 大10.11~12(2-11~12)
 五右衛門風 (物語) 大11.5(3-5)
 一つぶの涙 (〃) 〃
 坊やと母さん (〃) 大11.6(3-6)
 赤い冠 (〃) 大11.9(3-9)
 化猫退治<1>~<2> (〃) 大11.10~11(3-10~11)
 おとなと子供 (〃) 大12.1(4-1)
 ワンワンのお話<1>~<3>(〃) 大12.4~5(4-4~5)、7(4-7)
 お月さまをたべたワンワンのお話 (〃) 大13.1(5-1)
 盲人めくらと小犬こいぬ (〃) 大13.2(5-2)
 エスキモーのふたごの話<1>~<5> (〃) 大13.2~6(5-2~6)
 白い仔豚 (〃) 大13.6(5-6)
 メニーとココの冒険(エスキモーの双生児の話<6>~<7>)
 (〃) 大13.7~8(5-7~8)
 女舟(エスキモーの双生児の話<8>) (〃) 大13.9(5-9)
 楽しい航海(エスキモーの双生児の話<9>) (〃) 大13.10(5-10)
 最後の太陽(エスキモーの双生児の話<10>) (〃) 大13.11(5-11)
 泥棒よけ (〃) 大13.12(5-12)
 胡桃パン (〃) 大14.2(6-2)
 二つの木の実 (〃) 大14.3(6-3)
 海豚とり吾作の話 (〃) 大14.6(6-6)
 少年の頃 (〃) 大14.7(6-7)
 指頭の文字 (〃) 大14.8(6-8)
 虎ちゃんの日記<上><下> (〃) 大14.9~10(6-9~10)
 子供部屋 (童話劇) 大14.11(6-11)
 梅漬の皿 (物語) 大14.12(6-12)
 幼ない時・宿揚・火事 (物語・きょうだい<上>) 大15.2(7-2)
 つけ髭・芝居ごっこ (〃<下>) 大15.3(7-3)

それ以後（昭和）の主な著書（初出）

- 童話集『トテ馬車』川上四郎絵 1929 古今書院
『ワンワンものがたり』川上四郎絵 1929 金蘭社（金蘭えばなし叢書）
童話集『地蔵さま』川上四郎絵 1932 古今書院
童話集『葱坊主』川上四郎絵 1932 古今書院
『陸奥の嵐』須藤しげる絵 1933 大日本雄弁會講談社
童話集『竹やぶ』1938 古今書院
『勤王兄妹』中一弥絵 1939 大日本雄辯會講談社
『山田長政』大石哲路絵 1942 大日本雄辯會講談社（南の英雄）
『海の隼』1948 中文館書店
『兄弟物語 剣侠二つ星』1948 妙義出版社
少女小説『千鳥笛』伊藤幾久造絵 1948 ポプラ社
『泣かぬ星丸』伊藤幾久造絵 1949 ポプラ社
少女小説『山姫かづら』落谷虹児絵 1949 ポプラ社
『とらちゃんの日記』吉井忠絵 1960 岩波少年文庫
『おつきさんをたべたはなし』東本つね絵 1963 ポプラ社（絵童話文庫）
『ちくたつく』二俣英五郎画 1963 童心社（美しい心シリーズ）
- 翻訳**（「講談社」は1958年まで「大日本雄弁會講談社」が正式社名です）
フェアブル「フェアブル虫物語」1931 厚生閣書店
邱長春「西遊記物語」1931 平凡社（世界家庭文学全集）
「名作お伽話 アリババ物語」川上四郎絵 1939 講談社の絵本
ラーゲルレフ原作『ニルスの冒険』1946 講談社（世界名作童話）
バーネット「小公子」1940 大日本雄辯會講談社
ハーベイ『ロビンフッドの冒険』1951 講談社（世界名作全集）
セギュール『ろばものがたり』編著 1951 講談社（世界名作童話全集）
パーキンズ『エスキモーのふたご』編著 加藤まさを絵 1953 講談社（世界名作童話全集）
- 全集**
『新日本少年少女文学全集 28 千葉県三集』1960 ポプラ社
『千葉県三童話全集』全6巻 1967-1968 岩崎書店

その他

千葉県三生誕百年ふるさとフェア実行委員会「鹿沼が舞台の作品集 けんか」

1993

※ この他、共著、再話など無数にあります。

表紙写真館

児童雑誌「童話」以後、昭和に入ってからの子葉省三著書より。



「陸奥の嵐」

(昭和 8 年 3 月 8 日・講談社)



「安寿厨子王物語」

(昭和 10 年 6 月 1 日・講談社)
(少女倶楽部付録)



「烈女政岡」

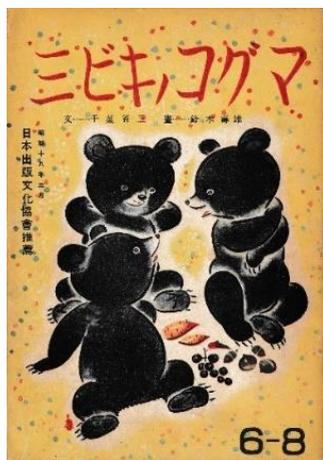
(昭和 11 年 2 月 1 日・講談社)
(少女倶楽部付録)

←上書口絵に解説と共に掲載された
筆者千葉省三の肖像



「落花の舞」

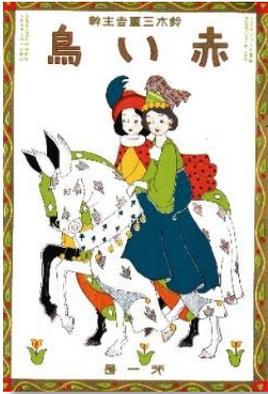
(昭和 12 年 1 月 1 日・講談社)
(少女倶楽部付録)



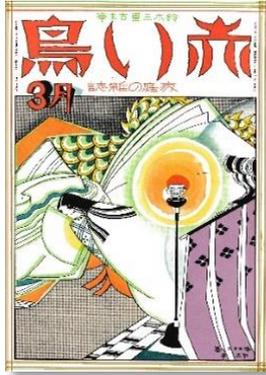
「三ビキノコグマ」

(昭和 18 年 1 月 25 日・国民社)

大正～昭和初期の児童文学雑誌から



「赤い鳥」第一巻第一号
(大正7年7月1日発行)



「赤い鳥」第二十二巻第三号
(昭和4年3月1日発行)

「子供の純性を」育むため
児童の世界に真の芸術を、
と意気込んでの創刊だったが、
「経済的」理由により
11年で休刊に。
しかしこの運動が刺激となって
幾つもの児童雑誌が生まれた

いずれも赤い鳥社
(復刻版なので
体裁は綺麗です)



「赤い鳥」第一巻第一号
(昭和6年1月1日発行)
(原本)



「赤い鳥」第十二巻第三号
鈴木三重吉追悼号
(昭和11年10月1日発行)

1年おいて復刊するも、
5年続いた後
主宰者の死去により終刊。



「童話」第一巻第一号→
(昭和21年5月1日発行)
日本童話会

←「童話研究」第一巻第一号
(大正11年7月5日発行)
日本童話協会
(童話の学術的、本質的研究
を目的とした団体)





←「童話」第一巻第一号
(大正9年2月25日発行)

「童話」第七巻第七号→
(大正15年6月5日発行)
コドモ社

表紙・装丁・挿絵は川上四郎
が主に担当
作品募集記事も載せながら
右の号で突然終刊した

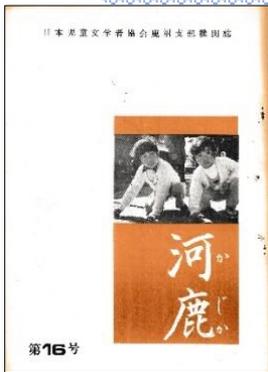


←「日本児童文学」創刊号(昭和21年9月1日発行)

初代会長は小川未明。
二度の中断を経た後、日本児童文学者協会として
1955年から現在に至る

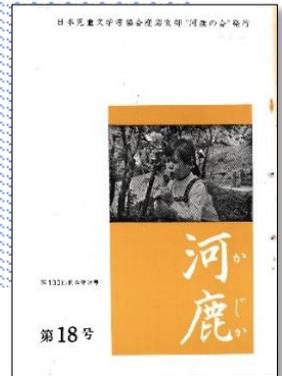
鹿沼の「河鹿の会」は、日本児童文学者協会の鹿沼支部
「河鹿」(下の写真)はその機関誌

「河鹿」第16号
(1972年6月24日発行)
主な執筆者：小杉義雄、黒川常幸



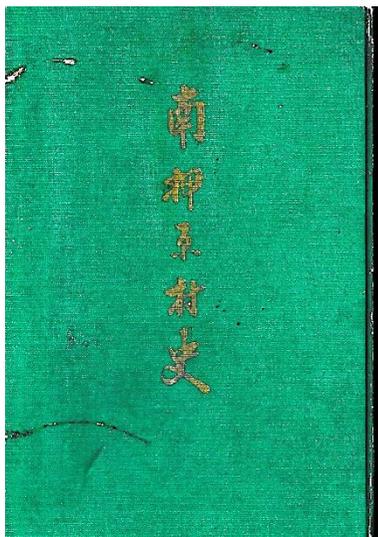
「河鹿」第17号
(1973年8月1日)
主な執筆者：上沢謙二、
小杉義雄、黒川常幸

「河鹿」第18号
(1973年12月31日)
主な執筆者：黒川常幸、小杉義雄

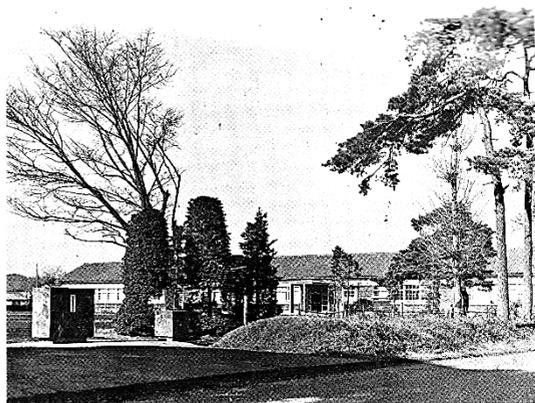


地図・絵葉書・写真帖に見る郷土の風景

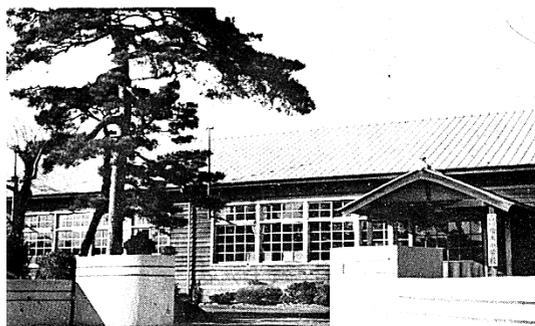
千葉省三が幼少年時代を過ごした楡木。その省三が新潟県に居を移していた頃の楡木周辺の風景を「南押原村史」に探る。



「南押原村史」
昭和 31 年 3 月 1 日
南押原村史編纂委員会発行



村立南押原中学校



村立楡木小学校



南押原村役場



自動車ポンプ置場



磯山神社



榆木神社



広済寺



冠塚 (判官塚古墳か)



成就院

小学校校歌に見る郷土の風景

鹿沼市立南押原小学校校歌

作詞…生井武司
作曲…鈴木満雄

- 一、見よ あくがれの山
なんたいは 北にそびえて
ゆたかなる 土かぎりなく
あたらしき 世のひかりおう
わくご われらぞ
すこやかに ただに
おいたちゆかん
- 二、見よ めぐみのながれ
くろかわは 南にうねり
さやかなる なみ木のかげに
もとめゆく 知はふかくすむ
わくご われらぞ
ひとすじに ただに
まなやびてゆかん
- 三、見よ うぶすなの丘
おしはらは あさひるがえり
そこごもる あいのかおれば
ほのぼのと おねにひともる
わくご われらぞ
きよらかに ただに
すすみてゆかん

鹿沼市立楡木小学校校歌

作詞…石島朝治
作曲…松本仁三

- 一、あさひのまどに 男体が
明るく高く すんでいる
学ぶ瞳も さわやかに
今日も静かに 考える
みんなかしこい 楡木の子
正しく強く のびようよ
- 二、みどりの風に 西山の
小鳥の声が 呼んでいる
学ぶ瞳も さわやかに
今日も本気で 考える
みんな元気な 楡木の子
豊かな町を きずこうよ
- 三、さくらのつつみ 黒川の
流れもめざす 広い海
学ぶ瞳も さわやかに
今日もなかよく 考える
みんな明るい 楡木の子
世界に伸びる 小学校

鹿沼市立みなみ小学校校歌

作詞…高内壮介
作曲…中島良史

- 一、男体はるか さわやかに
丘に光の 満ちる朝
我等 みなみの児童らは
友情の輪と 師の慈愛
学ぶ楽しさ 溢れきて
おお、我等が鹿沼みなみ小
- 二、わが故郷は 緑して
稲と作物 実る里
我等 みなみの児童らは
太陽の子と 自然の子
頬も輝く 小麦色
おお、我等が鹿沼みなみ小
- 三、黒川清く 空は澄み
友の呼ぶ声 丘の道
我等 みなみの児童らは
知識を磨き 情操も
香りゆたかに 育つ子に
おお、我等が鹿沼みなみ小

参考：吉村光右「風土の中の栃木県校歌集」（やしお文庫 第5号）
（昭和62年10月31日発行）



旧・南押原高等小学校校歌

作曲：橋本正作

一、流れも清き黒川に
沿いて緑の松しげり
一村なせるそが中に
立てるは我等が学舎ぞ

二、北には黒髪南には
筑波根続き見渡して
眺めも広きただ中に
立てるは我等が学舎ぞ

三、我等はここに集い来て
雄々しき山のたたずまい
清けき松の風の音
あやかりつつもいそしまん

参考：前出「南押原村史」

あとがき

僕は、鹿沼に関する書物をすべて明らかにしてみたいと思う。その到底成し得ぬ目標に向けて、まずは人物単位で、その関係書物を集めてみよう、というのが、本誌の目的である。

郷土史がおもしろいと感じるのは、単なる地域での出来事と捉えていた事実が、実は国の歴史に大きくかかわっていたことに気がついた時ではないか。鹿沼で起きた出来事も、日本で起きた出来事であり、日本の国の歴史である。学校で教わった日本での出来事に、あるいはかつて出版された有名な本や雑誌の執筆や編集に、鹿沼の人が大きく係わっていたことを知り、それを日本の多くの人を読み、学んでいた事実を知る時、それも郷土史の醍醐味であると思う。

省三が7歳から22歳までを過ごした楡木での出来事が「とらちゃんの日記」や「乗合馬車」などの有名な童話になり、日本の多くの国民に読まれたことにより、千葉省三の鹿沼での経験は、日本の国民の共有する記憶となった。

省三の上京にあたって、郷里を共にする半田良平の助けがあったことも、郷土愛につながる、嬉しい事実である。

半田良平についても、いずれ取り上げてみたいところです。次号は野州古峯原山と石原隼人に関する資料を集めてみます。
(阿部良司)



☪ 本号の内容 ☪

千葉県三『童話集 トテ馬車』より「私の生い立ち」・・・・・・・・・・ 2
 // 「鷹の巣取り」「乗合馬車」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
千葉県三『地蔵さま』より「宿の子供」「峠みち」・・・・・・・・・・ 12
千葉県三『とらちゃんの日記』より「けんか」・・・・・・・・・・ 17
『改訂 現代児童文学史』より「児童文学展望」「童画展望」・・・・・・・・ 22
「綴方生活」より「土の童話作家千葉県三論」・・・・・・・・・・ 24
『日本児童文学大系15・「千葉県三』』より「千葉県三年譜」・・・・・・・・ 28
雑誌「童話」復刻版 別冊〈解説・執筆者一覧〉より
 「雑誌『童話』の特色」「父のあの頃」「『童話』執筆者索引」・・・・・・・・ 33
それ以後（昭和）の主な著書（初出）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
表紙写真館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
地図・絵葉書・写真帖に見る郷土の風景・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
小学校校歌に見る郷土の風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51



判官塚古墳

鹿沼に生きた人、生きている本・第5号

2021年9月発行

小さな旅クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail abe@abe-clean.jp